
たたかう女たち

りいち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たたかう女たち

【Nコード】

N5513R

【作者名】

りいち

【あらすじ】

キャバ嬢、OL、女子高生、フリーター等…現代を生き抜く女達の、それぞれの恋愛模様。切なくて甘くて格好悪くて、でも愛おしい。女は強いもの。そして思っているよりずっと脆いもの――

強い女―京子、24歳―

「はい京華さん、今日もお疲れ様」

六本木にあるキャバクラ、ファラオ。

黒服からロッカーの鍵を受け取り、更衣室へ行くと、同期のねねがヌーブラを外しているところだった。

お疲れ、とねねが言った。彼女の綺麗なくびれは、女の私でもつい目を奪われてしまう。

「こんな早い時間に上がるなんて珍しいね。いつも来る客は？」

「ああ……」

アレは、と言おうとした時、外から店長の声がした。

「京華。指名のお客さん来たからやっぱり残って！」

隣りで着替えていたねねが苦笑いを零す。

明日も朝から病院だから、今日は早く帰りたいかったのに……。心の底ではそう思いながらも、これもポイントに繋がるんだと自分に言い聞かせて必要以上に明るく返事をした。

鏡でドレスの皺をチェックし、グロスをたっぷり塗ってから更衣室を出る。

1番テーブルに座っているいつもの顔。先程、ねねが『いつも来る

客』と言った奴だ。

私はとびきりの笑顔を作って、小走りで林のもとへ向かった。

「どうしたのぉ？明日まで出張って言ってたのに！」

「京華を喜ばせたくて！びつくりした？」

林の口から酒とにんにくの臭いがする。既にどこかで飲んできたのだろう。さり気なく鼻に手を当て、臭いを遮断した。

林は41歳の平凡なサラリーマン。半年前に初めてこの店で会った時から私を指名している。くたびれたスーツを見ると、毎夜キャバクラに通いつめる程稼いでいるとも思えない。

「ねえ竜ちゃん。出張お疲れ様ってことでシャンパンで乾杯しようよ」

が、そんなことはどうでもいい。

たとえこの男が私と話す為だけに借金しているとしても、そんなこと私には全く関係ないのだ。

林は頷き、機嫌よくメニューに目を通し始める。

私がお何か言つよりも早く、彼は口を開いた。

「これにしようか、ドンペリピンク」

「わーい！ドンペリ大好き！」

いつもカフェパリくらいしか頼まない林にしては珍しいと思いいながら、気が変わらない内に素早く黒服を呼んでオーダーした。

「じゃあ、かんぱーい」

カチン、とグラスが合わさる。ドンペリは酸味が強くて不味い。昔から嫌いな酒だけど、今では顔色ひとつ変えずに飲めるようになった。

すると、ぽつりと林が呟いた。

「実はね、これからは京華ちゃんに会いに来れなくなるんだ」

「え？何で？」

「恥ずかしいんだけど、もう貯金がないんだよね」

誤魔化すように笑った林。私は笑えなかった。

自分の客を一人でも失うのは痛かった。

無理矢理飲んだドンペリが、乾いた口内に広がった。

「竜ちゃんは、私に会えなくてもいいの？」

「それは嫌だけど……でもお金が」

どうやってたら繋ぎとめれる？

なんて言ったら……

ぐるぐると色んな言葉が混ざり合う私の心境を無視し、脳天気な林の声が思考を遮った。

「じゃあさ、これからは外で会おうよ！」

チツ、と思わず舌打ちしそうになった。調子に乗んなと言いたいのを寸前で抑える。

こいつは本物の勘違いだ。

客じゃなければ目も合わせることがないというのに。

けれどこいつの表情からして、多分この一言を言う為に金がないなどと理由を付けてきたんだろう。

私の中の戸惑いが、一瞬にして苛立ちへと変わった。

「……でも私、お昼も仕事してるから、こうやって竜ちゃんが会いに来てくれなきゃ時間取れないんだ」

「それは分かるけど……」

昼の仕事をしているというのは嘘だ。ただ何かと都合が良かったため、客にはそういうことにしている。

私はまだ開いていない林のグラスにドンペリを注ぎながら言った。

「竜ちゃんに会えないと、寂しくて死んじゃうよ……」

さも心の底から寂しがっている、という声を出すと、まいったなあとかいた林が困ったように頭を掻いた。

まいったなあ、じゃねえよ。

「また連絡するね」

結局その日、林は3時間延長してから帰った。私の粘り勝ちだった。話し合った末、とりあえず当分はまだ客として繋いでおけるようだ。

ドンペリによつて気だるくなった身体を引きずりながら、今度こそ帰る準備をしようとバックルームのロッカーを開ける。

時間はもう夜中の4時過ぎ。あと3時間後には起きてお昼のバイトの用意をしなくちゃいけない。自然と溜め息が零れた。

「お疲れ様です」

外に出るとパラパラと申し訳程度に雨が降っていた。

送りの車の後部座席に乗り込むと、30代半ばくらいの運転手が何も言わずにアクセルを踏んだ。

次第に強まってきた雨を見ながらまた溜め息を吐いた。

窓を打ちつける雨の音が車内に響く。下品な色をした街のネオンがチカチカと視界に飛び込んできた。

暫くそれを眺めた後、私は静かに目を閉じた。

耳の奥にまで響く雨の音。

こんな夜は嫌でも疼く。体についた痣が。

相手の怒鳴り声と、自分の泣き声。

家具の壊れる音。ぐちゃぐちゃになったリビング。

体にくる、強い衝撃――

「着きましたよ」

愛想のない声で目が覚めた。

はっとして外を見るともう家の前に着いていた。知らない間に眠ってしまっていたようだ。

雨に濡れないよう小走りでマンションのエントランスへ。背中で車の発進音がし、遠ざかって行った。

時間は5時前。

シャワーを浴びて化粧を落としてベッドにダイブして……目が覚めたら病院だ。

強い女 2

「おはよう」

開きっぱなしのドアをノックすると、開かれたカーテンの向こうから直樹が顔を出した。

その笑顔を見てほっと胸を撫で下ろす。良かった、今日は調子が良いみたいだ。

「今日はお土産持ってきたよ」

病院へ来る途中に寄ったコンビニで直樹の好きな漫画の新刊を見せると、また笑顔になる。

ああ、良かった。と再び安心した。

直樹は肺癌だ。

入院してもう随分経つ。

肺癌といっても早期発見で、手術も既に終わったのだけど、その後の検査が長引いているのだ。

もし検査に引っかかれば、抗がん剤治療が始まる。

直樹は私が渡した漫画をパラパラと捲りながら、機嫌の良い声を出した。

「俺さあ、考えたんだけど」

「なに？」

「退院したら旅行にでも行こうか」

「旅行……何でまた」

「だってもうすぐ俺ら付き合って4年記念だろ」

「5年だよ」

「あつ……ごめん」

（しまった）

どっちも同じようなもんだよね、と私が言うと直樹は再び笑顔に戻る。

そして枕元からあるものを見せてきた。派手な文字でハワイと書かれた旅行パンフレット。

嬉しそうな直樹の笑顔を見て、胸がざわついた。そうだね、と曖昧な返事をした私から動揺を読み取ったのか一瞬直樹の目元が曇った。私は慌てて笑顔を作った。まるで取り繕うように、楽しみだねと。やばい。やばい。どうしよう。直樹が笑顔に戻らない。

「ちょっと飲み物買ってくるね」

直樹を残して病室を出た。白々しかったかもしれない。それでも気まずい沈黙が流れる前に、最悪直樹が癇癪を起こす前に、その場を去りたかった。

一階まで下り、そのまま外の喫煙場所まで駆けた。

落ち着かない指先を抑えるように、ハンドバッグからバージニアス
リムライトを取り出して火を点けた。

吸って、吐いて、深呼吸。

今し方吐き出した煙が青空へ上っていく。それを見ていると、男が
一人、前方から近付いてくるのに気が付いた。リヨウだった。

「来たんだ」

「京子さんこそ、早いですね」

私よりも頭ひとつ分背の高いリヨウを見上げた。逆光に映るリヨウ
の顔はよく見えないけど、多分笑ってる。
左耳の太いピアスを揺らしながらリヨウが私の目の前に立つ。

「直樹さんに会いました？」

「うん。今日は機嫌良いよ」

ちなみに昨日は最悪だった。何を話しかけても返事をせず、それど
ころかめげずに向き合おうとする私に対して、枕と共に彼が投げつ
けてきた言葉は『うるせえ偽善者』だった。悔しくて、その日は泣
きながら帰った。

でも、その言葉はあながち間違いじゃない。

「直樹さん、急に怒りますもんねえ」

天気の良い朝にぴったりの、呑気な声でリヨウが呟いた。友達の少
ない直樹にとって、リヨウは頻繁に見舞いに来る唯一の後輩だ。高

校の時、二人は同じサッカー部だった。

「そろそろ行こうか」

背の高い灰皿に煙草を押し付けて私は言った。院内へ歩き出してすぐ、追いかけてきたリヨウの声。

「別に無理しなくてもいいんじゃないですか。退院したら、別れるつもりなんですよ」

くるりと後ろを振り向く。相変わらず逆光の、リヨウの姿。

「うん、そうだよ。でも、分かんない。さっき直樹に退院後の旅行の話されて、で、私、逃げてきちゃった」

私が急に病室を抜けて不機嫌になっているかもしれないと、若干怯えながら戻った。

だけど私の後ろにいるリヨウの姿を見て、直樹はかろうじて笑顔を見せてくれた。だけど長い付き合いだから私には分かる。きっと、怒ってる。

直樹とは同じ高校の同級生で、18の時に付き合った。

卒業と同時に二人で東京に出た。大学に進学する直樹に私が着いて行ったのだ。

同棲し始めたのは一年が過ぎた20歳になってからだ。

一緒に暮らし始めて2年。直樹は変わった。大学も辞め、パチンコと酒にはまった。私がキャバクラで稼いだ給料をかじりながら、適当にアルバイトを転々とする直樹にイラついて私も小言が多くなった。

私が別れを切り出すたびに、直樹はそれを暴力で抑えつけようとした。

最初は食器が割れただけだった。

次には壁に穴が開き、私のお気に入りの壁時計が壊され、そして遂に直樹の拳が私に向いた。

幼い子供のように震えている私を直樹は力強く抱き締めた。

ごめん、離れないで――と。

それは幾度となく繰り返され、本格的に別れようと決心した直後、直樹の癌が発覚したのだ。

「じゃあ俺、そろそろ仕事戻ります」

それまで直樹と喋っていたリョウの声にはっと顔を上げる。

おう、と直樹は何事もなく答えた。

リョウは病室を出る時私を見た。心配そうに少し微笑んでから、彼はいなくなった。

二人きりになった空間で、少しの沈黙が流れた。パイプ椅子に座った私は膝の上でギュッと拳を握る。そこで初めて、手に汗が滲んでいた事に気が付いた。

「今日も仕事だろ？」

先に口を開いたのは、直樹だ。
うん、と小さく頷く。

「もう帰れば？」

「……うん」

解放された——そう思った。

「私だったら絶対別れるね」

待機中の部屋にねねの声が響いた。

雨の日曜日は客足が遠のく。客はまだ一組しかいない。

周りにいた子達がチラリとこちらを伺うように見てきた。その視線がそらされるのを待って、私は口を開いた。

「でも今弱ってる直樹を一人にしたら、どうなるか分かんないよ。自殺でもされたら……」

「その優しさにつけ込んでるんだよ。京華は甘やかしすぎ」

「でも」

「だってDVだよ？彼女に暴力振るうとかあり得くない？今はいいかもしれないけど退院したら絶対また同じ事の繰り返しだよ」

そうかな、と私は答えただけねねの言い分が正しいんだろうということは分かっていた。だって……直樹に蹴られた太ももの痣はまだ残ってる。

旅行の話をしたのも私を離さない為だろう。だけどあの時の直樹の笑顔は心からのものだって信じたい自分もいる。

ねねがまた何か言おうとした時、黒服が彼女を呼んだ。あとでね、と言いついて彼女は出て行く。

ねねがいなくなって少し経ってから、近くにいた女の子が寄ってきた。最近この店に入った年下の子。前は違う店で働いていたという。名前は……何だっけ。

「京華さんの彼氏さんって、DV系なんですかあ」

話を聞いていたのだろう。

猫が舌なめずりするような話し方だった。必要以上に引いたアイラインが不自然に浮いている。

「そんな事もないんだけど、ね」

「へえ。マリアの彼氏もそっち系なんですよあ」

「そっち系？」

「あ、暴力系ですう」

そうなんだ、と当たり前障りない答えをして携帯を弄るふりをした。こういう子は苦手だ。

ああそうか、そういえばマリアとかいう名前だったなと違うことを思う。

「マリアは殴られても全然好きなんですけどねえ。しかも彼ホストだからあ、店来いって言われたら行っちゃうんですよ。馬鹿ですよねえ」

馬鹿だ。それは彼氏じゃなくて色恋営業だ。マリアの顔をもう一度見た。馬鹿だ。確かにヘラヘラ笑うところとか、喋り方とか、いかにも騙されやすそうな雰囲気をしている。

それでも私は、健気だねと言葉を選んだ。正直、どうでもいい。

その日は結局、後から来たフリーの客四組ほど接客してから終わった。マリアと送りの車が被らなかったことが幸いだ。

今年で24。私、いつまでこんな仕事してるんだろう――。

車の窓越しに明らかな年の差がある男女が手を繋いでいるのを眺めながら、ふとそんな事を思った。

強い女 3

数日間、私は直樹の病室を訪れなかった。

リヨウと会うことも勿論なく、昼間は寝るか女友達とご飯へ行き、夜はいつも通り仕事へ向かった。

罪悪感は堪らなくある、けど少しの間だけでいいから病室から、直樹から、離れたかったのだ。

だけどある日、検査の結果が出たとの連絡を受けて朝一番に病院へ飛んだ。

久しぶりに見た直樹は随分と痩せこけていた。

「今週中には退院できるってよ」

息を切らして病室に飛び込んだ私に直樹は言った。まるで、吐き捨てるように。

退院できるという事は検査結果に以上はなかったという事。辛い抗がん剤治療も受けなくていいのだ。

なのに直樹は鋭い瞳で私を睨みつけている。

明らかに雰囲気悪い直樹の近くに看護婦と医者が困惑した表情を浮かべて立っていた。

何があったのか、棚の上のものはほとんど床に落ちている。リモコンも、花瓶も、枕も。

……直樹。名前を呼ぼうとしたけど声にならなかった。
彼が堰を切ったように叫んだ。

「テメエ何で見舞いに来なかつたんだよ！今まで何してたんだよ！」
喉が切れるのではないかと不安になるくらいの金切り声だった。
直樹の怒鳴り声に反応して私の体が小さくなる。

「おいっ聞いてんのか！テメエ……俺がこんな時に他の男に色目使
つてんじゃねえぞ！」

烈火の如く怒鳴り散らす直樹。頭の中が真っ白になり、思わず一歩
下がった。

殴られる……また、殴られる。食器が割れ、壁時計が壊れ、壁に穴
が開き、直樹の右腕が私の顔に――。

自分の泣き声と直樹の怒鳴り声が同じくらいの大きさで響いた。
瞬間、慌てた先生や看護婦が直樹の体を押さえつける。私はその場
にしゃがみ込み、あとからあとから押し寄せてくる涙を拭うことも
忘れていた。

こわい。こわいこわいこわい。

直樹が退院する。

また、殴られる――

直樹は強制的に鎮静剤を打たれ眠った。

軽いものだから一時間くらいで目を覚ますらしい。

先生や看護婦が去り際に何か言っただけと覚えていない。こんな時に
リョウがいてくれたらまだ良かったのに、その彼もない。

私は俯いたまま、直樹の寝顔さえ直視出来なかった。床に散らかった直樹の私物を片付け、割れた花瓶の破片を拾ってビニール袋に入れる。

ひと通り片付けてから病室を出ようとした時、リヨウが入ってきた。時間は昼の12時。きっと仕事の昼休みに抜けて来たんだろう。

「あ、直樹さん寝てるんすね」

いつもと変わらない日に焼けたリヨウの顔を見た途端、また涙が溢れた。

「え、あの、どうしたんすか？」

状況が分かっているリヨウに先ほどの事を説明すると、彼は苦い顔をして直樹の方を見た。何と答えていいか分からないのだろう。重々しく、彼は口を開いた。

「多分直樹さん、抗がん剤治療受けたかったんじゃないかな」

「それ、どういう……」

「自分が退院したら、京子さんが離れていくって分かってるんですよ。だからそんなに取り乱したのかも」

「いくら直樹でも、それはないよ」

「さあ。本心は分かんないっすけど……それ程直樹さんにとって京子さんの存在は」

「リヨウは……冷静だね」

第三者だから、とは言わなかった。

私だって、いい彼女を完璧に演じれていたわけじゃない。勘の鋭い直樹が気付くのも当然だ。偽善者、と彼は私に向かって言い切ったわけだし。

だけど、その偽善に縋りついてるあんたは何なのよ。

素直に喜びたかったのに。偽善でも同情でも、退院できることを心から喜びたかった。直樹と一緒に。

「……別れるよ、私」

「その方がいいですよ。京子さんにとっても」

リヨウが私の手を握った。

私は我に返り、慌ててその手を引っ込めた。酷く切なげな表情で彼が私を見るからいたたまれなくなつて病室から逃げた。私、逃げてばかりだ。

病室へ戻ったのは30分後だった。しばらく近くの喫茶店で時間を潰した。本当はリヨウに会うのも気まずいし、そのまま帰りたいかったけど。

音を立てないようにそつとドアを開ける。リヨウの姿はなく、直樹はまだ寝ているようだった。

私はいつものパイプ椅子に浅く腰掛け、今度はその寝顔をちゃんと

見た。

だめだ。また、泣きそう。
でもこれは、何の涙かな。

「京子」

寝ている筈の直樹の口元が動いた。彼はゆっくり瞼を開けると天井の方を見つめる。そして、私の方に視線を動かした。
暫く沈黙が流れた。

廊下を歩くスリッパの音が微かに聞こえてくる以外、何も響くものがなかった。

「京子。ごめんな」

「……」

「頼むから、離れないで」

滅多に泣かない直樹の瞳から零れた涙。

胸がキリキリと痛んだ。吐きそうなくらい。

私は両手を差し出した。

握ったその手は酷く冷たかった。リヨウを拒んだ私の手が今、直樹の手を掴んでる。

偽善者、と誰かが言った。

「それ、同情じゃん」

直樹の事を報告すると、ねねは私に向かってそう言った。予想していた台詞だった。

確かに、そうかもしれない。もう直樹に対する感情は愛なんていう綺麗なものじゃない。もつとずるいものなのだろう。

だからこそ思うのだ。
情は、愛よりも重い。直樹への情が私の体にのしかかっている。
重すぎて、私なんかの力じゃ容易く振り払えない。

思わず溜め息が漏れた。ねねが呆れたように苦笑いする。
ふと、トイレから出てきたマリアの姿が視界に入った。白いドレスを纏って颯爽と歩く彼女は、ホストに騙されている馬鹿女には見えなかった。

けど、私はマリアとは違う。
殴られても縋りついて追いかけるほど愚かじゃない。
もしも直樹が病気になっていなければ、きっと今頃別れてた。

「京華さん。指名のお客様来られました」

黒服に呼ばれ、脳天気な顔してテーブルについている林を見るとまた溜め息が零れた。

頭を切り替え林の元に駆け寄る。

会いたかったよ、京華。と林が嬉しそうに言う。
離れないで、京子。と聞こえる筈のない直樹の声がした。

予定より少し伸びて直樹は退院した。

朝迎えに行つて、タクシーに乗つて二人で家に歸つた。

久しぶりの我が家に直樹は心なしか、穏やかな表情を見せた。機嫌はそう悪くないようだ。

荷物をほどこき、スポーツバッグに詰めていた直樹の私物を片付け、ついでに台所にあつた直樹の灰皿を捨てた。もう必要ないだろう。

「ねえ直樹」

ソファ―に寝転んでいた直樹が首だけをこちらに向ける。

彼は何かを感じとつたのか、私が喋り出す前に、底抜けに明るい声で旅行の話を始めた。

「ハワイもいいけど、グアムも安いんだよな。京子はどっちがいい？」

質問に答えることができず黙り込んでしまった。

「俺が昔ハワイ行つた時は台風と被つちやつたんだよなあ。秋頃だったかな？もう最悪だったよ」

必死で沈黙を繋ごうとする直樹が別人に見えた。

「……直樹、退院したばっかで海外なんて行つて大丈夫かな」

「大丈夫だって。あ、それじゃあ国内にするか。俺、四国とか行つてみたい」

「ねえ直樹。……別れようか」

一瞬にして静まり返った。

直樹が私をじっと見詰める。

私も同じように直樹から目を離さなかった。

ふと、高校時代のことが脳裏をかすめた。

私も直樹もまだ制服を着ていた頃。

私は今より化粧気がなく、直樹は今より髪が長かった。

直樹のママチャリの後ろに乗って、毎日一緒に帰っていた。タイヤが砂利道の上を走るたびにお尻が酷く痛かったのを今でも覚えてる。

「俺退院したばっかで、京子は何でそんな事が言えるわけ？」

「直樹は……変わったよ」

「俺は俺だよ。それに、京子だって変わった」

「……そうかもしれないね。私もう、直樹と一緒にいるのが辛い」

がしゃんっ、と大きな音が響いた。テーブル横のスタンド照明が倒れた音だ。直樹が蹴ったのだ。

怯みそうになったけど、奥歯を噛んでこらえた。頑とした表情の私

に、直樹の表情が少しだけ戸惑いの色を見せる。

「お前、俺が病気だから一緒にいたとか言わねえよな」

私が言葉を探していると、直樹は立ち上がって倒れたスタンド照明を再び蹴った。

そして何も言わずに私に詰め寄り、その痩せた腕を振り上げて私の髪の毛を乱暴に掴んだ。

痛い、と思わず声を上げる。引っ張られた髪の毛じゃない。心が、痛い。

「そうやって、また私を暴力で縛り付けるの」

思ったよりも声が震える。

学生服を着て、はにかんだように笑っていた少年の面影はもうどこにもない。

「直樹は何で、変わっちゃったの……」

何が直樹を変えたんだろう。東京に出たのがいけなかったのか、大學生生活がうまくいかなかったからなのか、はたまた私が水商売なんてしてるから？

その中の全部が理由な気もしたし、どれも違うような気もした。

鋭い目つきの彼が、口を一文字に結んで私を睨みつける。泣きそうな顔してた。

殴られることを覚悟していたけど、直樹はそのままゆっくり手を離

した。

言葉を発さないまま、彼は私を抱き締めた。

どうしてそうしたのか分からないまま固まってしまった。直樹の行動の意味を理解する前に私も恐る恐る直樹の体に腕を回してみた。

直樹のその体之余りにも細く、思わず泣きそうになった。

直樹も泣いているのかもしれないと思ったけど私の首もとに顔を埋めているのではっきりとは確認できなかった。

「だってお前が……俺から離れていきそうで、」

「私は離れなかったよ。殴って怒鳴ったりしなくても、私はいつだってあんたのそばにいたのに」

直樹の肩越しに、倒れたままのスタンド照明が見えて思わず目を瞑った。

そして思った。私は同情で直樹のそばにいたんじゃないなかったのだと。だって私は、癌になった直樹を可哀想だなんて一度も思っていないかった。

私がそばにいたのは、病気をきっかけにしても元の直樹に戻って欲しかったんだ。暴力を振るう前の、優しくった直樹に。私がそばについて看病をすれば、直樹はそれを受け止めて大事に思ってくれるんじゃないかと、浅はかにも――。

言葉はなくとも伝わる。

ぎゅっと力を込める直樹の腕が、愛してると言っているような気がした。

応えるように私も抱き締めた。

ああそうか。

もっと早くに、こうしていれば良かった。

強い女 4

「おはようございます」

朝、更衣室へ行くとアシスタントの男の子がいた。彼は無言のままぺこりと頭を下げる。

相変わらずの無愛想だ。そんな調子で美容師なんていう接客業が勤まるのだろうか。

無理だろうな、と心の中で毒吐きながらタイムカードを押した。

直樹と別れてあつという間に一年が過ぎた。

季節は巡り秋になる。そろそろ肌寒くなってきた。

あれからは私は夜の仕事を辞めた。

今は昼間、美容室の受付をしている。給料はガクンと落ちたけど、元々金遣いの荒いタイプでもないので問題なかった。

店を辞めると、客はもちろんねねとも連絡を取らなくなった。

ドレスも全部置いてきた。誰かが使ってくれればいい。

リヨウからはたまに連絡が来るけど、お互い直樹の事には触れない。仕事がどうか体調がどうか、いつもそんなありふれた会話だ。

直樹は……何をしているんだろう。

新しい彼女はできたかな。今もまだアルバイトとパチンコでふらふらしてるんだろうか。体はもう、大丈夫なのかな。

思う事は今もまだ沢山ある。別れたって、電話番号やアドレスを消

したって、積み上げてきた記憶はそう簡単には消えない。
会いたいと思う時もある。でも会えない。
私達は絶対に友達なんかにはなれないのだから、別れると決めたなら本当にお別れしなくちゃ意味がないのだ。

「ねえ、両替行つてきてくれない？」

30過ぎた女店長が、受付で暇そうにしている私に向かってそう言った。

分かりました、と短く答えて更衣室から薄手のコートを取ってくる。外は風が強く、目の前では枯れ葉が舞っていた。
寒い。コートの襟をぐつと寄せて俯きながら歩き出す。

近くの銀行で両替が終わるのを座って待っている私に向かって誰かが懐かしい名前を呼んだ。

「京華さん？」

ぱつと顔を上げるが、一瞬誰か分からなかった。
くるくるの巻き髪に大幅にはみ出たアイライン。

あつ、と私も声を上げる。

一年ぶりに見たマリアは少し大人っぽくなったようだった。

「久しぶりですう。覚えてますか？」

変わらない口調で近寄ってくる彼女。

久しぶり、と呆氣にとられながらも答えた。

まさか朝の銀行でマリアに会うなんて思ってもみなかった。

「何してるの？」

「ここ私の彼氏んちの近くなんですよ」

「ああ確か……ホストの」

「京華さんこそ何してるんですかあ」

「私はこの近くの美容室で働いてるんだ」

へえー、と抑揚のない声でマリアは息を吐いたあと、家賃払いにきたんです、と聞いてもないのに説明してくれた。まさか、ホストの家賃まで払っているのだろうか。

長い髪の毛から隠れるように見えた鎖骨の痣が痛々しかった。

「京華さんの名字、佐野って言うんですね」

私の胸元についている名札を見ながらマリアは言った。

何だか気恥ずかしくなり、ちなみに名前は京子だよと聞かれてもないのに説明してしまった。

あはは、と甲高い声でマリアが笑う。

「マリアの……本名はなんていうの？」

それとなしに聞いてみると、マリアは一瞬だけポカンとした表情のまま固まった。

そして眉尻を下げた笑顔で言った。

「……もう、忘れちゃった」

平気そうな笑顔のマリアが、私には泣いているように見えた。彼女がどんな生い立ちで、どんな過去を抱えているかは知る由もないけれど、酷く切なくなっただのは確かだ。

電子掲示板の番号が光った。私の整理番号だ。両替が終わったらしい。

じゃあ、とマリアが小さく手を上げた。

じゃあ、と私も笑った。

金髪を靡かせ歩いていくマリアの背中をじっと見詰めた。

きっともう会うことはないだろう。何故か直感的にそう思った。

何だか……この世の全て、悲しくて堪らなかった。

その日の仕事終わり、リョウから不在着信があった。

時間は9時過ぎ。疲れていた私はかけ直すことをしなかった。すると家に帰ってからまた携帯が鳴った。やはりリョウだった。

「もしもし」

「あ、京子さんっ。すみません何度も」

「どうしたの？」

「あの……」

言葉を濁すリョウに、胸騒ぎを感じた。

長い沈黙を見送ってから、電話口で彼は言った。
直樹さんの事なんですけど、と。

その名前を聞いた瞬間、胸騒ぎは確かなものになった。一年間避け続けていた直樹の話題を振ってくるということは、相当なことだ。

「今まで黙ってたんですけど、直樹さん入院してるんです」

「入院……？」

「はい。京子さんと別れてすぐ、癌が再発して」

「嘘、でしょ……」

頭の中が真っ白になった。最後に触れた直樹の体を思い出す。すっかりやせ細ってしまった、あの背中。

「何で、今まで黙ってたの？何で急に……」

「直樹さんに口止めされて……でも直樹さん、京子さんの事いつも気にしてたから、俺がずっと報告してたんです」

リョウが今まで私に電話をして近況を聞いてきていたのは、直樹の為だった。

一年間、ずっと。

私は何も知らず、てっきり元気に暮らしてるもんだと。まさか、嘘だ。

混乱している中、再びリョウの声がした。

「直樹さん、結構その、状態が酷くて……抗がん剤もずっと投与されてるけどなかなか……それで、」

「……」

「自殺未遂、したんです」

仕事は休んだ。

朝一番にリヨウが迎えに来て、リヨウの運転で病院へ向かった。化粧をする間もなく、一睡も出来ずに腫れた瞼はサングラスで隠した。

車内で交わされる会話はなかった。リヨウと会うこと自体数ヶ月ぶりだったけど、久しぶりなんていう挨拶もなく。

私は煙草に火を点けて窓の外に煙を吐き出す。小雨が地面を濡らしていた。

病院に到着し、リヨウに案内された病室の前に立つ。

病院独特の臭いが鼻をついた。

訳もなく体が震えた。色んな感情が混ざり合って、動けずにいる私の背中をリヨウが優しく促す。

小さく頷いてからドアノブに手をかける。

カーテンの向こうに覗く白いベッド。

ゆつくりとそのカーテンを引くと、仰向けに寝かされている人物を見た。

私の記憶の中の直樹ではなかった。

髪の毛のない頭。別人のように瘦けた頬。目の窪みは深く、顔は土色だ。

随分と小さくなってしまった直樹の姿はショックだった。これが、本当にあの直樹なのだろうか。

ピ、ピ、ピ、と音がする。直樹の心拍数を表す機械は規則正しく動いていた。

「直樹、」

たった一年で、こんなにも変わってしまうものなのか。

「……京子？」

薄く開かれた瞼が私を見た。リョウの話によると、はさみで切ったらしい彼の右手首には白い包帯が巻かれている。

ねえ直樹、死ぬほど……辛かったんだね。

「何で京子が……」

私がサングラスを外すと、直樹の震える唇が微かにそう言った。よく耳を澄まさなければ聞こえないくらい小さい。

「リョウが教えてくれたんだよ」

「……そうか」

部屋は静寂に包まれた。激しさを増す雨音が窓を打ちつけた。直樹は自嘲気味な笑みを浮かべて言った。

「みつともないだろ。こんな形で再会したくなかった」

「馬鹿。何で自殺なんか……」

「もう、治らないみたいなんだ」

「そんな事ないつ。辛くても治療すれば絶対治るよ。ねえ直樹」

「……」

「私がいるから。私……直樹のそばにいるよ。今まで一人でよく頑張ってきたよ。ねえ、今度こそ、一緒に頑張ろう」

癌はもう不治の病なんかじゃない。治ってる人も沢山いる。それを伝えたかったのに、上手く言葉に出来なかった。

「やめてくれ」

直樹はそう言い放った。

「俺たち……別れて良かったんだよ。病気だからって、戻ってくる
ことない」

「違うよ……違う。だって私、」

「……やっぱりお前、偽善者だな」

「……」

「お前はお前の人生を生きてくれ。俺なんかに躓くな」

直樹はそれだけ言うと口を閉ざした。

実は、病室まで来る途中にリョウから聞いていた。これ以上の治療は無駄らしいと。直樹の残りの人生は、あと一年もないかもしれないのだと。

直樹が私から顔を背ける。首だけを反対側に向けた彼の表情は確認できない。

ピ、ピ、ピ、ピ、と休みなく鳴る機械音。これがいつか、止まってしまうんだ。

「私……」

目頭が痛んだ。目の奥が熱くなつて、鼻がツンとする。唇が震える。頭を向けた直樹をじっと見つめた。

今までの思い出が走馬灯のように駆け巡る。

私に告白してきた高校生の直樹。

照れたような笑顔。優しく包んでくれた大きな腕。

東京に来て、一緒に暮らし始めた当初は毎日楽しかった。私の作ったご飯に文句をつけながらも食べてくれた。

直樹がパチンコに勝った日は、二人で焼き肉に行った。

京子、と直樹が私を呼ぶ。

離れないで、と言ったあの科白。

そして、殴られた夜も、別れを決めた一年前のあの日も、全部、何一つ、忘れていないよ――

「……私、あなたの心臓になれば良かった」

「……」

「私があんたの心臓なら……意地でも動き続けてあんたの命を救うのに」

瞳から涙が溢れた。

偽善じゃない。今、心からそう思った。

無意識のうちに噛んでいた下唇から、じわりと血の味が滲んだ。

顔を見せない直樹が、鼻を吸る音がした。歯が力チ力チと音を立てて震えているのが分かる。悲しいなんてレベルじゃない。心が痛い。直樹に殴られた時よりもずっと。

「そしたら俺、お前の事……傷付けなかったかな」

言葉を発せずただ俯いて、止まらない涙を垂れ流した。後から後から涙ばかりが押し寄せてくる。

顔をぐしゃぐしゃにして嗚咽を漏らす私を直樹は振り返らない。きつと今、彼も同じなのだと分かっていた。

「やっぱり京子、もう来ないでくれ」

直樹は最後にそう言った。

「京子さん、こっち」

「リヨウ」

改札の向こうで手を振るリヨウの姿を見つけて一目散に駆け寄った。初めて降りた駅に戸惑いながら、頼もしいリヨウの後を追いかける。

向かうは直樹のもと。

直樹にはもう来るなと言われたけど、最期まで会わせてもらえなかったけど、空の上の直樹はきっと許してくれるだろう。

最後のあの言葉の通り、あれ以降私は面会遮絶とされた。看護婦によれば、患者さんの意思ですからとのことだった。それでも諦めず、何度も訪れたが駄目だった。

それから数ヶ月後、直樹は還らぬ人となった。看取ったのは家族だという。

そして葬式は身内だけでひっそりと行われたらしい。報告を受けても泣かなかった。だって直樹は、私なんかよりもっともつと辛かったんだから。

「ねえ、お花買っていこうよ」

「あ、そうですね」

リヨウの腕を引っ張って近くにあった花屋に入る。並べられた色とりどりの花を眺める。

優しいそうな店員さんが、何かお探しですか？と尋ねてきた。

空の上の直樹が笑ってくれるような、綺麗な花を添えよう。

嗚呼だけど……

彼は一体、何の花が好きだったのだろう――

「京子さん」

しゃがみ込んで考えていた私に、彼が手を差し伸べる。その大きな手を私は取った。

あの時拒んだ、リヨウの手を。

やがて選んだのは真っ白い水仙。白は直樹の色だった。

純粹で、子供みたいに怒鳴り散らす姿さえ汚れを恐れているように見えた。

きっと彼の姿は、死ぬまでこの目に焼き付いて離れない。

「行きましょうか」

「うん」

直樹に、報告がある。

来年からリヨウと一緒に暮らし始めるということ。

きっと直樹は、リヨウなら仕方ないと笑ってくれる気がする。

青空の下、手を繋いで歩いた。

ねえ直樹、あんたともこんな風に、自然に二人歩いていければ良かったよね。

でもあの時、あんたの心臓になりたいと泣いた私の言葉は嘘なんかじゃないよ。

あんたが死んじゃうから言っただんでもない。

だって、生きてる時から思ってたもん。

あと、それと、ねえ、直樹

花言葉は、追憶――

弱い女―順子、24歳―

「あー……やっぱり切りすぎたよね」

すっかり短くなってしまった前髪を引っ張りながら、本日何度目かの溜め息を吐いた。

鏡の中の自分の顔がひどく幼く見えた。

数時間前までは頬骨の先までであった前髪も、今じゃ眉毛が見えるか見えないかの瀬戸際でぴしりと揃っている。

やっぱり冒険なんかせずにいつもの美容室行けば良かったと後悔しても、切り落とされた前髪は戻ってこない。

膨れっ面の自分は、それぞれは不細工だった。

その側で、陸がクッキーをかじりながらじっとこちらを伺っている。彼女が着ているスウェットは、昨日と同じだ。

「いいじゃん。何しても美人なんだから」

そう言った彼女の口からクッキーの粉がポロポロと零れた。それらはあぐらをかいて座っている彼女の太ももに落ちる。

「ちょっと、床に落とさないでよ」

「ああ、ごめんねエ」

私は陸から顔を背け、再び鏡の中の自分と向き合った。何度見ても違和感があるし、そもそも似合っていない。

「そのうち伸びるよ。気にし過ぎだつて」

いつの間にか立ち上がった陸が、私の手から鏡を奪った。
返してよ、というよりも先に彼女は口を開いた。

「ご飯食べに行こう。あたし奢るからさ」

「こんな前髪で外、出たくない」

「拗ねてるキミも可愛いけどさ、あたしもお腹すいて死にそうなんだよ」

時間は夜の8時過ぎ。

今日は朝からろくなものを食べていないと、クッキーの最後の一口を頬張りながら陸はそう言った。

それなら私が美容室に行ってる間にでも、勝手に作って食べてれば良かったのに。

別にわざわざ2人で食べなくたって……とは言わずに渋々承諾し、私達は適当に着替えて近所の焼き肉屋へと向かった。

よれよれのジーンズとパーカーに着替えた陸の隣りで、キャメルのコートを羽織った私が歩く。周りから見ればおかしな組み合わせだろう。

日曜日の夜という事もあり、店内はなかなかの賑わいを見せていた。家族連れの小さな子供がバタバタと埃を巻き上げながら走っているのを横目に見ながら、案内されたテーブルへついた。

適当な肉と野菜を頼み、生ビールで乾杯したあと煙草に火を点ける。

運ばれてきた肉を丁寧に焼いている陸を見ながら煙を吐いた。

「はい、お皿出して」

「ん」

陸は、程よく焼けたカルビと生のキャベツを手際良く私の皿に乗せた。

私はキャベツは生派だ。

反対に、焼く派の彼女もそれを知っているから私の分のキャベツは焼かない。

「ど、うまい？」

「まあね」

私の素っ気ない返事にも陸は嬉しそうに笑う。

陸の焼いた肉は本当においしかった。さぞかし、いい奥さんになっただろうに。レズじゃなければ。

「そっぴや私、ダイエット中なんだった」

「ダイエット？キミそのままでも十分じゃん」

「良くない。私油断したらすぐ太る体質だもん」

「ふーん。知らなかったよ」

陸は肉を焼く手を休めない。あまり興味がなさそうな声音でそう言った。

この女が何を考えているかはよく分からないけれど、私を好きだという事は確かだ。

だけど私はレズじゃない。好きな男だってちゃんという。陸もそれを知っている。知っててこの女は、週に4、5回のペースで通い妻のように私の元へやってくる。

（――馬鹿な女）

そう吐き捨てる代わりに煙草の煙を吐き出した。

陸と会ったのは2年前の冬。

彼女はその頃、あるショットバーでバーテンダーをしていた。

初めて行った先のカウンター越しに違和感なく話しかけられ、同性という事もあり気兼ねなく携帯番号を交換した。

レズだと知ったのは、2度目にそのバーを訪れた時。

本人から聞いたのではなく、隣りに座っていた見知らぬ常連客から聞いた。

人生にくたびれたような、40手前のサラリーマンだった。

お姉ちゃん、知ってる？陸ちゃんはね、レズなんだよ。お姉ちゃん、狙われてるかもね。と、下品な顔で焼酎グラスを傾けていた。

驚きはしたものの、陸を避けることはしなかった。彼女は私に対して優しく、懸命で見た目も綺麗だったし、作るお酒も美味しかった。出会って2ヶ月程過ぎた頃、初めて2人でご飯を食べに行った居酒屋で本人からレズビアンだと告白された。それと同時に私に対する気持ちも。

彼女はかなり緊張しており、食べ物には手をつけずに熱燗を立て続けに三瓶程飲んだ。

酔っ払って足取りのおぼつかない彼女を部屋に招いたのは私だ。別に意味があつたわけではない。

ただ、そのまま帰るのが可哀相だった。

それに私を好きだと言つてズ女、それはそれで面白いと思つたのだ。

「食べないの？」

陸の声にはっとした。指の間に挟んだ煙草がもう随分と短くなつてゐる。そのまま灰皿に押し付け、再度彼女を見た。

長い睫にさらさらのロングヘア。瞳は色素の薄い茶色で、形の良いい唇を持つてゐる。

端から見れば普通の、いや、普通よりも恵まれた容姿の彼女。顔のパーツが濃い私よりもずっとずっと女らしい。

きつと、いい奥さんになるはずだ。本当に、レズじゃなければ。

冷たい風が私の真つ黒な髪を撫でた。

帰り道、コートのポケットに両手をつ込み、早足で家路を目指す。斜め後ろを歩く陸が、真つ赤にかじかんだ両手に息を吹きかけながら寒いね、と顔をしかめた。

「手、繋ぎたい？」

私がそう聞くと、陸は一瞬驚いたように目を見張る。

その後すぐに素の顔に戻って渴いた笑いを零した。酷い人、と言葉を添えて。

「そんな気更々ないくせに」

「まあね」

私はコートのポケットから煙草を取り出し素っ気なく答えた。馬鹿なレズの恋愛に付き合う気はない。

手を繋ぐこともしないし、一緒のベッドで寝る気もない。陸も無理にそうしたいとは言ってこないから、家には入れてあげる。

料理や洗濯やらをやってくれるから助かっているのも事実。この女が好きでやってることだから、ありがとうなんて言うつもりもないけれどそれでも幸せそうに笑ってるからいいんだろう。便利な女。

家についてからすぐに暖房を入れた。

陸は欠伸をしながらこたつに足を突っ込む。

すると突然私の携帯が鳴り出した。

この着信音は秀之だ。

「もしもし」

躊躇わずに電話に出た。陸がチラリとこちらを見る。

秀之と一言二言話してから電話を切った。

「今から出てくる」

「あの男のどこ？」

「うん」

「……」

陸が何か言いたげな表情で私を見る。私はその視線を無視し、脱いだばかりのコートに袖を通した。

「何よ」

「別に。焼き肉食べたから歯磨きした方がいいよ」

陸にそう言われ、あつと気付いて洗面所へ向かった。確かに焼き肉臭い女とキスしたい男はいないだろう。

丁寧歯を磨いてから鏡に向かってにっこり笑ってみた。うん、大丈夫、問題なし。但し、前髪以外は。

「私今日、多分帰らないけどあんた泊まるの？」

寝転んでテレビを見ている陸の背中に話しかけると、彼女はこちらを向かずに頷いただけだった。

拗ねているのだ。言葉にせずとも分かる。

「……ネエ、その前髪で会いに行くの？」

「行くわよ」

そう言つて乱暴にリビングのドアを閉めた。

私は玄関に置いてあるフレグランスを体に振りかけ、何も言わずに家を出た。

先程よりも強い風に髪を乱される。

それを片手で抑えながら早足に歩く。大通りに出て流しのタクシーを拾い、逃げるように乗り込むと同時に運転手に言った。

「桜塚通りまで」

呼吸が乱れる。走ったわけでもないのに。

心臓が波打つ。秀之に会いに行く時のこの胸の高鳴りは、あと何度繰り返せば収まってくれるのだろうか。

流れる景色を視界に入れながら、嬉しさのあまり叫び出したい衝動に駆られた。

今から会えないか、と。

電話口の彼は言った。

すぐに行くわ、と私は当然の如くそう答えた。

秀之との電話で交わす言葉はいつも短い。無駄な話はせず、用件だけ。

秀之と出会った半年間、ずっとそう。

それでも私は舞い上がってしまうのだ。

タクシーが桜塚通りに着いた。

運転手に2千円渡し、車を降りる。外の空気は相変わらず冷たかったけど、この胸の内は燃えるように熱かった。

馴れた道を小走りで進み、何度も訪れたマンションへ入った。17階建ての立派な高級マンションだ。広いエントランスには小さな噴水まで置いてある。

秀之はここに1人で住んでいる。でも、秀之の力ではない。

部屋番号を押して待っていると、中からオートロックが外されて自動ドアが開いた。

大理石の床を買ったばかりのジミーチュウでカツカツと鳴らしながら進む。

エレベーターの中で手鏡を取り出しメイクや髪や表情を入念にチェックした。

ああ、やっぱり今更になってこの前髪が恥ずかしくなってきた。だけれどもどうすることもできない。

鏡の中の自分を色んな角度から眺めてみたけど、どれも不細工にしか写ってくれない。

もしエレベーターについてる防犯カメラの映像を警備員か誰かが見ていたら、とんだナルシスト女だと思うだろう。

秀之の部屋は15階の1505室。

部屋のインターホンを鳴らして数秒後、内側からドアが開いた。オレンジ色の間接照明と、少し眠そうな秀之の顔。

「早かったね」

「タクシー使ったから」

「そっか。入れよ、外寒いだろう」

さり気なく前髪を隠しながらヒールを脱ぐ。

ストッキング越しに廊下の冷たさを感じながらリビングに入った。

白黒で統一された品の良いインテリア。特にイタリア製だという大きな皮のソファは彼のお気に入りだ。

暖房は入れたばかりなのか、少し肌寒かった。

対面式のキッチンでは、彼がコーヒーを煎れてくれている。

「順子、腹減ってる？」

「うっん。焼き肉食べたから」

秀之のお気に入りソファに腰かけ、コートを着たまま渡されたホットコーヒーを啜る。

「焼き肉って、一人で？」

「違う、陸とよ」

「ああ、例のレスビアン？」

「そう、例のね」

へえ、と秀之がニヤリと笑った。

薬指に指輪を嵌めたその左手がゆっくりと私のコートの襟を掴む。彼はもう一方の手で私からコーヒーを奪うと、テーブルに置いた。私のコートを脱がし、そのまま床に落とす。

シワになってしまふ、そう思っただけハンガーを探したけど、秀之にキスをされた瞬間にどうでも良くなった。

私達はベッドに移動し、改めてお互いの身体を触り合う。いつもは冷静な秀之が、セックスをする時だけ感情的になる。

小さな子供のように、私の胸に貪りついてくるその表情を見ると興奮するのだ。

情事を終えたあと、秀之は必ず煙草を吸う。でも私は吸わない。秀

之前では吸わない事になっている。いつか、煙草を吸う女が嫌いだと零していたから。

私はベッドに寝たまま、ボクサーパンツ一枚で床に座り込んでいる秀之をじつと見ていた。

「なあ、レズ女ともこうやって乳くり合ってるわけ？」

満足げな表情をしてこちらを見る秀之。一瞬言葉を詰まらせた。返答に困ったわけではない。何てつまらない事を言い出すのだと思っただけだ。

「そんなわけないでしょ。私、女に興味ないから」

「まあ、そうだよな」

くくく、と喉を鳴らして笑う彼の横顔を見ながら、何がそんなに可笑しいのか私には分からなかった。

灰皿に煙草を押しつけたあと、再び布団に潜り込んできた秀之は、私の胸を弄りながら耳元で囁いた。

「俺、そのレズビアンと会ってみたいな」

「……」

「会わせてよ」

「いや」

「何で？」

「秀之、彼女とやりたいとか思ってるから。で、実際会ったら多分もっとそう思うと思うから」

「美人なんだね」

「うん」

「いくつ？」

「22。私よりふたつ下」

「ふうん。若いね」

秀之はそう言って、嬉しそうに笑った。

弱い女 2

気付けば月曜日の朝を迎えていた。

ふかふかのベッドで目を覚ますと、隣りで寝ている秀之が背中を向けているのを見て意味もなく悲しくなった。

でも今はそんなこと言ってる場合じゃない。手探りで枕の下から携帯を取り出し、時間を確認するとまだ7時前だったのでほっと安心した。出勤時間は9時だ。

ボーっとする頭を抑えて起き上がる。ああ、煙草が吸いたい。

素っ裸のまま自分の下着やら服を探して集めた。ストッキングが見つからなかったけど、後回しにして下着と服を身につけた。

勝手にポットでお湯を沸かし、コーヒーを入れようとした時、秀之が起きた。

「おはよう、何時……?」

「7時」

「あ、まじ?やべえな」

言いながらゴソゴソとベッドから這い出て彼はソファアに座った。

「何で?いつも家出るの8時半くらいでしょ」

「あーうん。それはそうなんだけど」

言いにくいのか、寝ぼけているのか、秀之は頭を掻きながら大きな欠伸をした。

そして煙草を一本抜き、ライターで火を点ける。ああ、私も吸いたいな。

「秀之もコーヒー飲むでしょ。もう少しでお湯沸くから」

「え？……ああ」

私はテレビをつけると秀之の隣りに腰を下ろして目覚ましテレビを見た。

秀之も煙草をくわえたまま、ボーっと画面を見つめている。しかし、静かに言い放った。

「順子、悪い。帰ってくれる？」

「……え？」

思わず秀之を見る。彼も眠たそうな瞳でこちらを見た。

「今日の朝アイツが来るって言ってたの忘れてたわ。何か俺の部屋に荷物置きに来るんだって、ほんと面倒くさいよね。順子も鉢合わせしたら面倒だろ」

「そう、ね」

私はサッと立ち上がり、床に置き去りにされていたままのコートを拾い上げた。やっぱりハンガーにかけておけば良かった。キャメルにシワは不恰好すぎる。

布団の中からストッキングを見つけ出し、伝線しないよう慎重に履いた。

ソファー横のバッグを拾い上げ、リビングを出る直前、それまで黙っていた秀之が口を開いた。順子、と。

「似合ってるよ、前髪」

とつさに手で隠した。すっかり忘れていた、短い前髪。
私は何か言おうとしたが、秀之はそれを遮った。

「じゃあね。また連絡する」

悔しくて泣きそうになった。昨日のままの化粧で寝てしまったから顔全体が酷く重い。

マンシヨンのエントランスから外に出た所でコートのポケットから煙草を出してくわえた。冷たい風が頬を撫でる。おかげですっかり目が醒めた。

秀之に会う前のドキドキ感は一晩で綺麗さっぱり消えてしまった。
今は気だるさと後悔が胸を重くしている。

「悪い。帰ってくれる？」

分かっているのに、電話一本でホイホイ来てしまふ自分に嫌気がさす。

秀之と会った後はいつも同じ気持ちだ。

火をつけようとライターを探していると、一人の女が私の目の前を横切り颯爽とマンションの中へ入って行った。
栗色のボブに薄いベージュのロングコート。

あ、『茉莉花』だ――。

思わず手を止めて、マンションの中へ消えて行く女の後ろ姿を見送った。

秀之の彼女。名前は茉莉花。ジャスミンという意味らしい。馬っ鹿みたい。

一度だけ写真を見せて貰ったことがあるのですぐに分かった。

彼女は秀之の命綱だ。

何故なら秀之の会社の社長の娘が茉莉花らしい。将来出世するには欠かせない女だ、と笑いながら言ったのは秀之本人だ。

実際、この高級マンションの馬鹿高い家賃だつて茉莉花が支払っている。まだ20歳そここのくせに、親の金で。

私にはそんな力もお金もない。だから秀之の彼女にはなれない。でもこれだけは言える。

秀之は、茉莉花よりもずっと私の方を愛してる。

私と秀之は、半年前に偶然出逢った。

何てことない、友達の紹介で。

商社マンとして確かな地位を築き始めている秀之にはいつも余裕がある。

好きになるのに時間はかからなかったけど、既に秀之には付き合っ
て一年の茉莉花がいた。

聞けば秀之に一目惚れした茉莉花が猛アタックしたらしい。

初めて二人きりの食事に誘われたその日に秀之のベッドでセックスをした。彼は確かに魅力的だし、セクシーで、どこか子供のような面影を残していた。

茉莉花より先に出逢いたかった、と酷く切なげに秀之が言った。
その言葉に縛られ、早半年。茉莉花にバレていないのは、間違いない秀之のフォローが完璧だからだろう。

秀之と茉莉花は似合わない。

写真で見た時は可愛いお嬢様という印象を受けたけど、実際見ると何の色気もないただの小娘だった。秀之も哀相に。あんなガキの恋愛ごっこに付き合わされて。
と、そう思うのはわざとだ。

高くそびえ立つマンションを見上げた。何も知らない小娘が、せつせと家賃を払っている高級マンション。

もしかすると今頃、昨夜私と秀之があんなに熱く抱き合ったベッドで、茉莉花と秀之は朝から盛っているのだろうか。

酷く胸が痛い。ライターも見つからないし。

諦めてポーチの中から鏡を取り出して覗いた。くたびれた顔。今から仕事だと思っただけに更に憂鬱だ。

――似合ってるよ、前髪――

パチンと鏡を閉じてポーチにしまった。
これ以上見ていると気が狂いそうになった。
そのまま大通りまで走り、タクシーを拾って乗り込んだ。

（全然似合っていないわよ、馬鹿）

「で、おめおめと退散したわけだ」

キャラメルマキアートを吸いながら陸が言った。どこか楽しそうな表情にイラつとしたけど、一人でいるよりは多分ずっとましだ。

陸はバーテンだから、昼間は常に暇している。だから急な呼び出しにも駆けつけてくれる都合の良い奴。

スタバ奢るから、と電話すれば飛んで来てくれた。でもきつと、陸なら奢るなんて言わなくても来てくれるだろうな。

とにかく出勤時間まで暇を潰すにはもってこいの相手。
会社近くのスタバに座り、いきさつを話した。

「その男も残酷だねエ。キミの気持ち知っててそんな事言うんだから。だから早く切っちゃいなくてあたしいつも言ってるのに。キミにはもつといい人がいるよ」

私は陸のいつもの説教を聞き流して、秀之の部屋で飲み損ねたホットコーヒーを口につけた。

「秀之、あんたの話したら会いたがってたわよ」

「へ？何で？ていうかキミ、あたしの話とかするんだね」

「珍しいでしょ。レズって」

「あ……あアー、うん。そうかな。ん、ん。そうだよ、ねエ」

あはは、と乾いた笑いを見せた。陸は私は何を言っても怒らない。いつもへらへら笑ってくれる。だから秀之とのやりきれない鬱憤をいつもぶつけてしまう。

「あんたはさ、いないわけ？私以外に好きな女」

「え、んん。前はいたよ。今は……いない、かな」

「そう。その女もレズ？付き合ってたりの？」

「ん、まあ」

「悪かったわね。私、あんたとセックスできないけど」

「ちよっ、キミ声大きいよっ」

空になったキャラメルマキアートを吹き出す勢いで陸は慌てて言った。

私は何食わぬ顔で、朝食代わりのクロワッサンをかじった。

22歳にして化粧つ気のない陸は、そのままでも十分美人だ。だから、ビューラーで睫を上げて、アイラインなんて引いたらもっと綺麗になるのだろうな、と思う。

「ねえ、あんたさあ」

「なに……あ、それ一口頂戴」

私は無言でクロワッサンを渡す。

陸は美味しそうに頬張りながら、もう一度『なに?』と言った。

「もし、男からセックスしようって迫られたらどうすんの?」

聞いた瞬間、漫画のように陸はクロワッサンを喉に詰ませた。もう氷しか残っていないキャラメルマキアートのストローを急いで吸う。

その必死な顔がおかしくて、私は思わず笑ってしまった。

顔を真っ赤にした陸が、周りの目を気にしながら困ったように言う。

「あのねエ！キミ朝っぱらからっ……」

「いいじゃない。実際どうなのよ」

「……え？んん……断るよ。丁重に」

「どうしたって男とはセックスしないのね」

「キミがどうしたって女とはセックスしないってのと同じだよ」

私は時計を見た。もうそろそろ会社に向かわないと遅刻してしまう。

じゃあ、と陸にお金を渡して立ち上がった。そして彼女を置いて一人、スタバを出た。

一条あやね。今日から中途採用で入った女は名前の印象通り、何だか胡散臭いと思った。

「よろしくお願いします」

鼻にかかる声。くるくるの茶色い巻き髪。ピンク色の指先に必要以上を上を向いた睫に太すぎるアイライン。

私の仕事は、ウェディングプランナーだ。平たく言うと、結婚式を新郎新婦と共に1から作る人。

この仕事を選んだのは、別に幸せな方々のお手伝いがしたいからとか、結婚式が好きだから、とかそんな人に感心されるような理由ではない。

ただ、なんとなくだ。ただ、なんとなくで4年間。任される新郎新婦の数も多くなった。

そして何故か、この一条あやねの世話役を押し付けられた。そんなもん一年目の新人にさせりゃあいいのに。

マネージャー曰わく、『あなたと同じ年だから』ということらしい。うそ。こいつ24歳？絶対年下だと思ったのに。

他の社員達がひたすらパソコンと向き合ったり、資料とにらめっこしている狭い事務所で、一条は少し緊張した面持ちで私を見つめている。溜め息が漏れた。

「……じゃあ、とりあえず中の案内するから」

「はあい」

イラっとした。一条がそう答えた時に揺れたふわふわのポニーテールに。

彼女の、いかにも女！という雰囲気は、茉莉花を連想させるのだ。

館内を歩き出した。その斜め後ろを一条が着いてくる。

初めに厨房を見せ、新郎新婦や親族友人がそれぞれ使っていくつかの控え室を通り、庭園を抜けて披露宴会場を見せた。

そして今度は螺旋階段で二階に上がり、チャペル内を見せる。

うちの式場は挙式も披露宴も同じ建物で行われる。

床も壁も天井も祭壇も、全て白で統一された神秘的なチャペル。パイプオルガンが置かれ、常にアメイジンググレイスが流れている。

「うわあ、綺麗ですね」

一条が無駄にリアクションしてみせた。その声のよく響くこと。

「私も早く結婚したいなあ」

「……」

「藤堂さんってずっとこの仕事なんですかあ？」

「そうよ。一条さんは前の仕事何してたの？」

「あつ、私キヤバクラで働いてましたあ」

さらりと言った一条の言葉に嫌悪感を覚えた。どうりで言葉遣いもなっていないし、見た目も派手な訳だ。男に媚びて金を貰う嫌な仕事。いや、あんなの仕事じゃない。仕事なんて言っていていいもんじゃない。

「10代の頃からキャバ嬢やってたんですけど、21くらいの時に付き合ってた彼氏がホストで、お金ないって言ったら風俗で働けて言われて、しばらく働いてたんですけどやっぱり無理で、」

「それ、騙されてたんだよ」

「そうなんですよう。もーやんなっちゃいますよ。家賃とかも払ってあげてたのに」

あはは、と他人事のように甲高く笑った一条は日本を代表する馬鹿女だと思った。

「でも今は普通のサラリーマンしてる人と付き合ってるんです。だから私もこうしてちゃんと働こうかなって。藤堂さんは彼氏とかいます？」

「いない」

レズとセフレならいるけど。

そつなんだあと言ったきり、一条は何も言わなかった。

(……悪かったわね。話のネタがなくて)

家に帰ると電気が消えていた。時間はまだ7時過ぎだ。陸が仕事に行くのは大抵早くても8時半。

リビングの明かりをつけても彼女の姿はない。

寝ているのだろうかと寝室を覗いてみたけどベッドのシーツが綺麗に整えられていただけだった。

まあ、いないなら別にいい。部屋が静かだし、陸を見ると無性に当たりたくなってしまう。あの子、何言っても怒らないから。

冷蔵庫から缶ビールを取り出そうとしてふと気が付いた。

「一本減ってる……」

確かに一昨日の夜、最後見た時は5本あった気がしたのに、4本しかない。陸はビールが嫌いだし……。

泥棒？でも、ビール一本だけ取る泥棒なんているのかしら。

「まあ、気のせいよね」

弱い女 3

「おめでとつございます」

そう言つて私よりもまだ若い新郎新婦を見送つたのが最後の一組だった。

式が終われば残るのは膨大な後片付け。披露宴を行った会場では既にどんでんが始まっている。

週末は結婚式ラッシュだ。今日は朝から晩まで式が入っていた。特に今日みたいな大安の日曜日は人気で、何ヶ月も前から予約が埋まっていた。

月曜日の朝、スタバで朝食と一緒に食べたつきり陸には会っていない。

半居候の彼女が、こんなに長く私の前から姿を消すことは一度もなかった。

ましてや連絡もしてこないなんて。

片付けの合間に携帯を開く。

着信一件、秀之だ。

今日は一緒に夕食を食べに行く約束をしている。後でかけ直そうと携帯を鞆に入れる。

「藤堂ちゃん、今日朝からずっとでしょ？片付けやつくくから先帰っていいよ」

綺麗に髪を束ねたマネージャーが人当たりの良い笑顔でそう言ってくれた。

32歳、独身の彼女はもうここで働いて8年になるらしい。お局、と呼ばれるわりに随分優しい人だ。

秀之に電話をかけるのは外に出てからにしよう。

約束の時間まであと1時間もある。

私は丁寧にお礼を言ってかけていたコートを羽織った。

残ったスタッフにも声をかけ、エレベーターの前まで立った時、化粧くらい直していこうとトイレに向かった。

入ろうとした時、中から聞き慣れた女の声が聞こえてきた。

「藤堂ちゃんって、彼氏とかいるのかなあ」

びく、と体が反応して足が竦んだ。

胸がざわつく。無意識に握り締めた鞆の柄がぐにやりと曲がった。

「えゝ。いないでしょ。固そうだし」

マネージャーの声に続いたのは、プランナー一年目の後輩の声だった。

「そうかなあ。でも今日もさあ、疲れた顔してるから気使ってやった途端、さっさと帰ったよ」

「確かにー！てか今日の藤堂さんのコートDiorでしたよ。見ました？」

「見た見た。これ見よがしに着ちゃってさあ。誰に買って貰ったか知らないけど」

(……………)

現実じゃないみたいだった。

会社は女ばかりだけど、波風立てずに上手くやってきたつもりだった。

疲れた顔なんてしてない。

ただ、少しだけ陸の事を考えてただけだ。

シワになったキャメルのコートをクリーニングに出したから、仕方なくDiorのコートをクローゼットから引っ張り出した。

陸が誕生日にくれたやつだ。こんな高いものいらなくて言ったのに、『キミに似合うから』って無理矢理押しつけられた。

これ見よがしになんて……。

悔しくて溢れそうになった涙を必死で堪えた。今から秀之に会うのだ。涙でぐちゃぐちゃのアイメイクでは絶対会えない。

婚期を逃した三十路過ぎのババアと、足手まといのクソガキにあんな風に言われる筋合いなんかない。

しかし2人の会話はもう既に何事もなかったかのように、私から一条あやねの悪口にすり替わっていた。

「もう一軒行くわよ」

「どうしたの？今日はよく飲むね」

イタリア料理店を出てから、私は秀之の手を引っ張った。既にワインを5、6杯飲んでいる。

秀之は乗り気じゃないらしく、マンションに帰ろうと誘ってきた。けど今はそんな気分じゃない。

時間は12時過ぎ。あることを思いついた。

「秀之……レズ女に会いたって言ってたわよね」

「会わせてくれるの？」

秀之がニヤリと笑う。

「会わせてあげるわよ」

そう言つて、タクシーを走らせた。

20分後、着いた先は陸の働いているショットバー。

洋風のモダンな店構え。ドアを開けると、そこまで広くない暗い店内。奥にはダーツもある。

いらっしやいませ、と言ったのは顎髭を生やしたマスターだった。私の姿を見た途端、順ちゃん久しぶりと笑いかける。陸が家に来るようになつてからは来ていなかった。勿論、マスターは陸と私が会っていることを知らない。

「陸いる？」

カウンターに座るなり、そう尋ねた。秀之も静かに私の隣りに腰掛ける。

「ああ、陸ちゃんね。今ちよつと買い出し行ってるんだ。もうすぐ帰ってくるよ。なに飲む？」

私はジントニツク、秀之はウイスキーを頼んだ。

マスターは秀之を私の彼氏扱いした。それが少し、心地良い。

客は私達の他に一人だけ。カウンターの端っこに座っている色白の女だ。

日曜日のバーなんてまあ、こんなもんだろう。

マスターが女の客の元へ行くと、秀之が呟いた。

「楽しみだな、レズビアン」

「そうね、私も楽しみ」

秀之と一緒にいるところを見たらどんな顔をするだろう。驚きか、ショックか。

陸の傷ついた顔を想像するとわくわくした。一週間も私を放っておいたあいつが悪いのだ。

ドアが開く音がした。さつと振り返ると、片手にコンビニの袋を持った陸が入ってきた。

一週間ぶりに見るが、当然どこも変わっていない。長い髪。細い身体。洒落つけのない格好。いつも通りの陸だ。

「陸ちゃん、順ちゃん来てるよ」

マスターの声に陸がこちらを見た。そして男と一緒に座っている私を視界に捉え、予想通り驚いていた。

「ああ……久しぶりだね」

しかし、それだけだった。傷付いた表情どころか、嬉しそうに笑うこともなかった。

何事もなかったかのようにカウンターのの中に入り、ビニール袋から牛乳を取り出して片付けている。

秀之は、初めて見た美しい陸の顔に暫く魅入っていた。

陸は片付けを終えてからこちらにやって来た。ああ、外は寒いねエと。

なんか、ムカつく。

「秀之よ。よく話してたでしょ」

わざと秀之の肩に触れて紹介した。秀之は真っ直ぐ陸の瞳を見つめながら、初めましてと甘い声で囁く。

陸はそんな秀之の色気には全く興味がないと言った様子で、愛想笑いをした。

「珍しいね。キミが店に来るなんて」

「何よ。悪いの?」

「はは。すぐそいう言い方するんだから。ん、嬉しいよ」

子供を宥めるような言い方だった。更にムカついた。私のこと、好きなくせに。

陸は時折、色白の女の方へ行き一言二言話していた。常連客なのだからと言う。

暫く飲んでいたが、秀之は明日も仕事だから、とお金を置いて帰って行った。本当は、茉莉花から呼び出しのメールが来たのを私は知っている。ばかばかしくなって、更に酒を飲んだ。もう完全な酔っ払いだ。

「大丈夫？こんなに飲んで。水、いる？」

「いないわよ！」

声を荒げた私のことを、色白女がチラリと見た。

「……荒れてんね」

「うるさい。連絡もして来なかったくせに」

カウンターに突っ伏した。無性に腹が立つ。会社も、秀之も、目の前の女の余裕な態度も何もかも。

「キミは、」

陸が口を開いた。

「あの男まで連れてきて何がしたいの？見せつけたかったの？」

「秀之が、あんたの事見たいって言ってたから連れてきてあげただけよ。私は別に、あんたなんて」

「じゃあ何で、キミは帰らないの？」

「……」

まだジントニックが残っているグラスを手の甲で弾いた。カウンタ―から落ちたグラスが隣の椅子に当たって床に落ちる。

大きな音をたててグラスが割れた。私は虚ろな目で陸を睨む。彼女は無表情のままだった。

マスターが慌てておしぼりを持ってきた。色白女がまた心配そうにこちらを伺う。

「マスターあたしやるんで。すみません」

陸はマスターからおしぼりを受け取り、カウンターから出て私の元に来ると無言でグラスの破片を拾い始める。

「服とか濡れてない？」

「……」

「……なに泣いてんの？」

「泣いてないわよ！」

私は涙を拭いながら陸から顔を背けた。そしてカバンの中から一万円札を2枚引き抜き、バンッとカウンターに置く。

「帰るわ」

マスターが会計をしてくれたが、おつりを受け取る前に椅子から立ち上がった。途端に足元がふらついて思わずよろける。やっぱり、飲み過ぎた。

「待つてよ、ねエ」

陸の声を無視してドアを開けたが、外の冷たい空気に晒されコートを忘れたことに気付いて振り返った。
まあいいや。幸い酒のおかげで寒さはそこまで感じない。むしろ心地良いくらいだ。

私はふらふらと歩き出す。大通りまで出たらタクシーを拾おう。

「ちょっとキミ！死ぬ気！？」

身体が軽くなったと思えば、陸が私のコートを持って肩を支えていた。

振り解こうとしたけど力が入らない。
彼女は私をその場に座らせ、大通りからタクシーを拾ってきてくれた。私を車内に押し込み、自らも乗る。

「〇〇町まで」

そう言った陸の横顔をもたれたシートから見上げる。

「何であんたも一緒に乗るのよ……」

「あたしも一緒に帰る。マスターには許可貰った」

何故だろう、それを聞いてどこか安心したのは。

静かな車内にはラジオの音だけが流れていた。

家にはなかなか着かない。私の家から陸の仕事場がこんなに遠いなんて気付かなかった。なのに陸は、週の半分以上を私の家で過ごしてた。

タクシーを下りて、マンションに入った瞬間、私は膝をついて俯いた。長い時間タクシーに揺られ、酒が逆流する。気持ち悪くて仕方なかった。

「うつ……」

「吐くの？ちよつと待つて。ここじゃあ……」

「もう無理っ……」

私は吐いた。正面から陸に抱きかかえられるようにして。嘔吐物が彼女の服にべったりついた。何度か咳き込んで、謝ろうとしたけどなかなか声が出なかった。

「あ……じ、め」

「ん、いいよ。大丈夫」

陸は私の身体を抱きかかえたまま後ろ向きでエレベーターに乗り込んだ。私は俯いて背中を丸めたまま、陸に促されるように進む。いつの間にか一人じゃ歩けなくなっていた。

部屋に入ってから、陸は嘔吐物だらけのパーカーを脱いでそのままゴミ箱に投げた。

私は這うようにトイレまで行き、便器に顔を突っ込んで再び咳き込んだ。

嫌悪感に押し潰されそうな中、陸の手が優しく背中をさすった。

「ん、」

目の前に差し出された水を飲むと涙が零れた。

「も、大丈夫……だから」

「でも」

「いいから。ほっといてよ」

どうしてなのか、そんな事言いたくないのに口について出る言葉は彼女を傷つけるものばかりだ。

でも陸は何も言い返さずにそばにいてくれる。そして気付いた。私はその優しさが怖かったのだと。怖いから、攻撃してしまう。

陸は無言で私の服と下着を脱がし、すぐにスウェットに着替えさせた。

思うように動けないでいる私の身体を支えながら袖に腕を通そうとする懸命な姿を見た。陸は私に対していつも懸命だった。

でも、スポンを履かそうと力を込める陸の爪が太ももに食い込んで凄く痛かった。

「キミが泣いてるとこ初めて見たよ」

初めて一緒に寝たベッドの中で、陸が呟くように言葉を落とした。私は頭まですっぱりと布団を被ったままで、陸が今どんな表情をしているのかは分からない。

明日はきつと、瞼が尋常じゃないくらい腫れているだろうな。

そんな事を思いながら何も答えずにいると、陸は再び話し始めた。

「今日サ、カウンターの一番隅にいた女の子いたじゃん。覚えてる？」

「……色白の」

ぼやけてあまり思い出せないが、顔立ちはきつと年齢よりも少し幼い感じの、大人しそうな雰囲気の子だった。

「あの子ね、最近よく来てくれるお客さんでさ。あたしと一緒になんだよ。つまりその、レズビアンっていう意味で」

「……」

「あたしネ、この一週間あの子の家に行ったんだよ」

「……」

私は布団の中で唇を噛み締めた。

ふいに秀之や、マネージャーや、後輩の顔が脳裏に浮かんで悔しくてたまらなかった。

自分が傷付いた分、私を好きだという陸に冷たくすることで心の平静を保っていたのだ。

だから自惚れていた。この女には私しかないのだと。この女の世

界は私の家と仕事を往復するだけなのだと。

でも違う。陸には陸の世界があった。

そう思うと、そばにいる筈の陸の声がいやに遠く感じた。

「キミがどれだけ私を利用しても、どれだけ雑に扱われても、それがキミの傍にいられる立ち位置ならいいと思ってた」

「……」

「そんな健気なあたしでも、ね。やっぱりしんどくなったりして、あたしを好きだって言ってくれる子の方にコロっと」

「あの子とセックスしたのね」

「んん……んー。それっぽいことは」

気持ち悪い、と心の中で呟いた。

「あの子がいてくれてあたし、キミの事考えずに済んだよ。楽し、いい子だし、でもね」

「……」

「でもあたし、一週間ぶりにキミを見た瞬間、やっぱり好きだって思っちゃった。で、隣の男に嫉妬した。駄目だね」

「……」

「だから、もうココには来ない」

「……」

布団の中は、息苦しくて仕方なかった。

ただ顔を上上げて陸の顔を見たら、もっと苦しくなると思って我慢した。

暫く沈黙が続いたが、口を開いたのはやはり陸の方だった。

「ごめんね」

言われた途端、何かが弾けた。

何か考えるより先にバツと布団をはがし、身体を起こして陸の顔を見いつきりビンタした。

鈍い音が部屋に響く。

「……っざけんじゃないわよ！あんたが勝手に好きになって、勝手に来て、勝手に失恋してんでしようがっ！謝られる筋合いなんてないわよ！」

「……痛いよ」

「傷付いた？私に好かれてるって、一度でも勘違いしたことあった？」

私は泣きながら陸を罵倒した。なのに陸は泣かなかった。目を伏せて、じっと耐えるように固まっていた。

ぐちゃぐちゃに壊してやりたかった。でも、どうすればそうできるのか分からなかった。

互いに何も言わぬまま時間だけが過ぎた。

耐えきれなくなつて、背中を向けた。
再び布団を被り、ぎゅっと目を瞑る。
陸が静かに、寢室を出て行つた。

弱い女 4

一睡も出来ずに朝を迎えた。

必要もないのに毎日セットしている目覚まし時計がけたたましく鳴り響いた。針は7時半を指している。

昨夜何度も吐いたせいで喉が痛い。重い身体を引きずるようにベッドを下りるが、寒すぎてつい動きが止まった。

尋常じゃない喉の乾きを覚えた私は寝室を出てリビングへ入る。こたつで寝ている陸の姿を発見した。

（何でコイツまだいるのよ……）

一瞥し、冷蔵庫からペットボトルを取り出して一気に飲み干した。すると、こたつ布団がごそごそと動き始めた。気配に気付いて陸が起き出したのだ。

私はその場に立ったままでそれを見ていた。

「ん……ああ、おはよう」

「おはようじゃないわよ。何で帰ってないのよ」

「ん。んんー……電車がなくて」

「今なら動いてるわよ」

陸はのそのそとこたつから這い出ると、小さく欠伸をしてから立ち

あがった。

そして小さく笑ったのだ。

「目、すごい腫れてんネ」

けたけたと笑う陸。何故が怒ることが出来なかった。言い知れない悲しさが胸に広がった。

いつものように罵倒してさっさと追い出せばいいのに、それが出来なかった。

呆然と立ち尽くす私を余所に、陸は大きく伸びをすると何か吹っ切れたようにこちらを見据えた。

「じゃあ……あたし行くね」

「……ねえ、最後に聞いていい？」

「ん、どうぞ」

「私のどこが好きだったの」

陸は丸い目を更に丸くした。そういえば、一度も聞いたことがなかった。

「んー、弱いのに強がること」

「それ、けなしてるの？」

「んーん。可愛いと思う、キミのそついうところ。あたしは、好きだったよ」

好き、だった、ね……。

腕組みをしたまま、ふうんと唸って視線を逸らした。

口先だけでも好きだと言えば、陸はきつと出て行かない。言おうかと思っただけ、やっぱり言葉が喉に引っかかって出なかった。

それに、私は陸を愛していない。少なくとも、陸と同じようには。

「あ、」

背中を向けて玄関へ歩く陸がふつと振り向いた。いつもの笑顔で。

「そのコート、着てくれたんだね」

彼女が指差した先に、Diorのコートがあった。無造作に床に置き捨てられたまま冷たくなっている。

「あ……別に。他に羽織るものがないから仕方なくよ」

「ん。でも、嬉しいよ。絶対似合うと思ったから」

「……私、あなたに何もあげたことなかったわね。手も繋いであげなかったし。いいわよこの際。握手でもしようか？」

冗談半分。本気半分。

しかし陸は『いいの？』と手を差し伸べてきた。

私も恐る恐る手を前に出す。

そして探るように、私たちの手のひらが重なった。

初めて触れた陸の手は、見た目よりもずっと厚く、暖かった。

ぎゅっと握り締めてから、身体がぐんと前へ引つ張られた。抵抗するよりも先に、あつという間に陸の両腕に抱き締められた。

「ちよつとっ……」

「いいじゃん。最後なんだし」

「……そうね、清々する。これで気兼ねなく秀之を家に呼べるわ。はつきり言つて、迷惑してたし」

「あア、そうか。ごめんねエ……」

陸がゆつくりと私から離れる。

私の顔も見ずに背中を向け、振り向かずと言った。

「あ、冷蔵庫にあつたビール飲んだの、あたしだよ」

そして今度こそリビングを出て行った。

少ししてから玄関のドアが開く音が聞こえ、すぐにバン、と閉じられた。いやに響いたその音はリビングの空気を一層冷たくした。

「怒つてよ……最後くらい」

「おはようござ……ってどうしたんですか、その目！」

一条の甲高い声が事務所響いた。マネージャーや他のスタッフがチラッとこちらを見た。

誰一人として触れなかった私の腫れた瞼を遠慮なしに指差す一条に、怒りの感情すら沸かなかった。

「昨日飲み過ぎて、ね」

明らかに泣いただろうとバレバレの嘘に一条は、私もよくありますうなんて相変わらず鼻につく声で言う。でも何だか、今はその明るさに救われた気がした。

私達の会話なんて聞いてない、なんていう素振りをするマネージャーの横顔を見て思った。今日はきつと、私の悪噂で持ちきりだろう。良かったじゃない。お喋りのネタができて。あんた達みんな、善人面した腹黒女よ。心の中で毒づいた。

が、女とは誰でも、本来そういうものなんだろう。

時計を見ると、もうすぐ担当の新郎新婦が打ち合わせに来る時間だった。

書類を手に事務所を出てすぐに追いかけてきた一条。何だろうと振り向くと、彼女は私の携帯電話を持っていた。

「藤堂さん、鳴ってますよ」

「あ、ありがとう……」

画面が開かれたままの携帯を受け取る。

秀之からの着信だったが、そのまま留守電に切り替え閉じる。仕事中にかかってきた私用電話は極力出ない。あの一件以来、何を

噂されるか分かったもんじゃないから。

「……………彼氏ですか？」

山本秀之と表示された画面を見たのだろう一条が尋ねる。

「彼氏じゃないわ」

「え？」

「他に本命の女がいるの。私は浮気相手」

……………何故だろう。言うつもりなんて全然なかったし、今までだってこんな事誰にも言わなかったのに。陸以外は。

なのに出会って数週間の一条あやねにさらりと言ってしまった自分に密かに驚いた。しかも、まるで、こんなこと平気みたいな言い方で。

「へえ〜そうなんだあ。その人何の仕事してるんですかあ」

多分この女が、馬鹿だからだろうな。

一条は相変わらず穏やかな口調で言った。その表情には軽蔑も憐れみも浮かんでいない。何となくだけど、誰にも言わないでいてくれる気がした。

「普通の商社マンっていうか……………サラリーマンしてる人。具体的にどんな仕事してるなんて知らない」

そうなんだあ、と一条はもう一度言った。それって、一番関心の無い時に言う返事よね。

案の定、もう既に心此処にあらずな一条は笑顔で去って行った。
分かりやすい女。

そして携帯をマナーモードにしてジャケットにしまう。
1ヶ月後、新しく新郎新婦となる男女との打ち合わせに向かった。

「あー、疲れた」

部屋に入ってくるや否や、秀之はソファーに寝転んだ。

一足先に仕事が終わった私は、自分のマンションで秀之を待っていた。

陸がもう来ないという事もあり、初めて秀之を家に招いた。

今まで一度も秀之を家に入れた事がなかったのは、こんな私でも一応陸に遠慮していたのだ。

「いい部屋じゃん、順子。何で今まで入れてくれなかったの？」

「ん。別に」

秀之の高級マンションにはだいぶ劣る私の部屋。

幸い陸の私物はひとつもなかった。歯ブラシのひとつくらい置いてあってもおかしくないくらい入り浸っていたのに。彼女も彼女で、

気を使っていたんだろうと今更ながら思う。

ビールが飲みたいと言う秀之に買い置きの缶ビールを渡した。
秀之はそれを一気に飲み干してから虚ろな目を見せる。
いつもと様子がおかしかった。

「俺、やっぱりお前しかいないわ」

「どうかした？」

「慰めてよ、順子」

秀之の手が私の首に回されたと思ったら、彼はいつもより強引に求めてきた。

秀之の唇が首筋から下へ移動し胸元を這う。

口から熱い吐息が漏れた。

思わず体を仰け反らせる。背骨にテーブルの角が当たって痛かった。
腰をずらせば、すぐに押し倒された。

「ちょっと秀之、どうしたのよ……」

「黙って」

私の服を捲り上げ、露わになったお腹に顔を埋める彼が子供のように見えた。

こんな風に甘える人だったのだろうか。

天井を見つめながら、私は思った。

「俺、茉莉花と別れたよ」

長いセックスの最中、彼は息を吐くようにさらりと言った。
え？と思わず聞き返したけど、存外喜んでいない自分に驚いた。

「どうして……」

「ちょっと色々あって、ね」

言葉を濁す秀之の表情が少し苦しげなのは、セックスのせいなのだろうか。

だけど茉莉花は秀之の命綱。こんなにあっさり終わるはずない。

まさか私との事がバレたのだろうかとも思った。振ったのか振られたのかすら答えてくれない。

私の上で揺れる秀之の腰の動きが早まった。その時、玄関のチャイムが鳴った。

思わずぎくりとする。

もしかしたら陸かもしれない――。

「秀之っ……誰か来たわ」

「無視しろよ」

「お願い。出てみなきゃ」

「無視しろ。どうせ他の男だろ」

秀之が投げつけた言葉に、頭が真っ白になった。突発的に言った言葉ではなかった。前々から疑っていた、確信をつけてやった、というような言い方だった。

「……あんたと一緒にしないでよ」

私は強引に秀之の体を突き飛ばして乱れた服を正した。

私を睨みつけた秀之を無視し、鳴り止まないチャイム音にただならぬものを感じながら急ぎ足で玄関に向かう。

外からガチャガチャとドアノブを回す音がした。

……陸？

不安に思いながら鍵を外したのと、秀之がリビングから『出るな！』と叫んだのはほぼ同時だった。

「あ、」

そこに立っていたのは陸ではなかった。携帯を片手に握り締めた茉莉花だった。

「どういうことよ!」

リビングまで強引に上がり込んできた茉莉花が半裸の秀之を怒鳴りつける声が響く。

私は混乱し、ただ呆然と突っ立っていた。

キツと茉莉花が私を睨む。目に涙を浮かべて。

ズボンのベルトを直しながら、秀之は焦ったように言い訳をする。

「茉莉花、違うんだ。落ち着いて……」

「今日変な女が乗り込んできたと思ったら、また違う女? 浮気相手何人いるわけ?」

(ああそうか……)

茉莉花の言葉ですぐに分かった。

私以外にもいたのだ、女が。

怒鳴り続ける茉莉花に、弁解の言葉が見つからない秀之を見ているとかわいそうに思えてきた。

ああ……この人、本当にどうしようもない男なんだな。

「いつから浮気してたのよ! 私を裏切るなんてよくできたわね! 昼間の女は誰よ! それにこの女だって……」

「昼間のはストーカーなんだ! 俺も困ってたんだよ! この人とは、何の関係もない……だってこいつ、レズと一緒に住んでるんだぜ?」

「よくそんなデタラメが言えるわね! あのマンションの家賃だって誰が払ってやってると思ってるの?」

「嘘じゃねえよ！なあ、順子！」

秀之と茉莉花が同時に私を見た。

秀之は縋るような目で私に助けを求めてくる。先程まで私を押し倒していた強気な彼はどこに行ったのだろうか。

もう既に涙でメイクがボロボロになった茉莉花の目が鋭い。

可哀想——彼女に対して何度も抱いてきた感情。それは彼女よりもずっと可哀想な自分を隠す為だった。だけど今は、黒くなった涙を流す茉莉花を見て、心からそう思う。

「私は……レズじゃないわ。秀之とは、何度も寝たし」

諦めたようにうなだれた秀之に、更に涙を溜める茉莉花の大きな目。

「でも秀之はあなたのこと、」

一番大切にしているわ、と言うつもりだった。事実そうだ。浮気しようが何だろうが、大切じゃなければプライドの高い彼がこんな風に茉莉花に縋ることなんてしないだろう。

ただ、大切にしているのは茉莉花自身なのか、彼女の背景にあるもののなのかは知らないけど。

だけど私が言うより先に茉莉花は首を振った。

「もう……充分よ」

そして一人、部屋を出て行った。

「……」

台風が去ったあのような部屋で、私と秀之はどちらも無言で茉莉花の出て行つたドアの方を見つめていた。
何だか酷く疲れた……。

そう思つた矢先、飛んでくる秀之の声。

「お前……何で茉莉花にあんな事言つたんだよ」

「……この期に及んで、全部私のせいにするのね。他に女がいることすら私だって知らなかったのに」

「お前があんな事言わなきゃ茉莉花は……！」

「出て行かなかった？　そうかもね。でも、あの子多分前から気付いてたわよ」

「は？」

「あなたの浮気よ」

最後に見せた茉莉花の疲れ切つた顔を見れば分かる。同じ女だから尚更分かる。

思っていたより、馬鹿な女じゃなかったのかもしれない。

「これからは家賃くらい自分で払うことね。あと、新しい職探しも」

「ふざけんなよ！俺……どうすれば。順子……助けてくれよ。もう俺にはお前しかいないんだ」

「今度は私が茉莉花の代わり？家賃払えって？冗談やめてよ」

「何だよそれ！どうせお前、俺が茉莉花と別れて嬉しいんだろ！」

腕を掴んできた秀之の腕をすぐに払った。

驚いた顔で私を見る彼。

自分でも意外なくらい、冷たい声が出た。

「触らないでよ。好きでもないくせに」

弱い女 5

秀之と別れて二週間が過ぎた。

あれから彼が茉莉花と寄りを戻したのか、そうでないのかは知らない。

あんなに執着していた男の事が、びっくりするくらいどうでも良い相手になっていた。

その間に一条が会社を辞めた。理由は知らない。

秀之と別れた三日後にはもう出勤していなかった。

辞めるという連絡がきた、マネージャーがどうでも良さそうに話した。

そして『だから嫌なのよね。水商売してた女って』と吐いた。

柄にもなく少しだけ、寂しいなんて思う自分がいた。

一条はいちいち鼻につく女だけど、嫌な女ではなかった。

でもきつと、あと5日もすれば一条のことなんて皆忘れるんだろう。勿論、私も。

寒いな。

時間はもう12時を回っている。私はマンションの下の公園のベンチに座って一人、冷え切った両手を擦り合わせていた。

近付いてくる足音に気付いて顔を上げれば、すぐ目の前には陸が立っていた。

彼女はにやつと笑って、久しぶりというより先に一言、寒いねと言

った。

「キミから『会いたい』なんて急に電話きたから、どんな顔して待ってるのかと思ってた」

「私どんな顔してる？」

「ん、んー。ちょっと前髪伸びた？」

「かもね」

私はライターを取り出し、煙草をくわえて火をつけた。

「呼ばれてのこのこ出てくるアンタも馬鹿ね」

はは、と陸は笑う。そしてロングコートのポケットに両手を突っ込んだまま、爪先で小石をつついた。

「キミ、それを確かめる為にわざわざあたしの事呼び出したの？で、こんな寒いところで一人待ってたの？」

私はその質問には答えなかった。

「今日……さっきまで、何してたの？」

「カノジヨのとこ。今一緒に暮らしてんだ。まあ、あたしが居候してるんだけど」

カノジヨ――

あの色白で童顔の女だろう。

陸は家に泊めてくれるなら誰でもいいのだろうか。したたかな女。猫みたいな奴だ。

私は、ふうんとだけ唸って煙を吐いた。

急に一緒に焼き肉を食べに行った時の事が懐かしくなった。そんなに前でもないのに、あの時私のお皿に手際よく取り分けてくれた陸と、今の陸は別人のようだ。

「で、キミはどうしたの？ なんか悲しい事でもあったの？」

「悲しい事……そうね。どうだろう。もし私が、あんたに戻ってきて欲しいって言ったら、あんたのカノジヨ悲しむかしら」

陸は、目をそらして、んんーと唸った。陸の癖だ。私はそれが、結構好きだ。

「悲しまない、ね。だってあたし、カノジヨのこと捨てないから」

「……酷い事言うのね」

「はは。散々言ってきたじゃない、キミ」

正直、陸はいつまでも私が好きだと思っていた。鬱陶しいくらい私の周りを彷徨く彼女は、私しか見えていない馬鹿なのだと。そして離れても、私が少し優しくすれば何だかんだで戻ってくるのだと。

私の機嫌で動かせる女だと思っていたのに。なのにこうして、はっ

きり断られた。あの陸に。

私はまだ長い煙草を足元に落として靴底で踏んだ。

惨めね、本当に。秀之の事言えないわ。

陸は私の隣りに座った。長い足を真っ直ぐに伸ばして深く腰掛ける。

「あの男とはどうなったの？」

「秀之ね、別れたわ」

「だからあたしに電話したわけだ」

「そうだけど、違う……何ていうか、寂しいのかしら。私も」

「んー。キミ、友達いないもんね」

「うるさいわね。あんたもそうでしょ。年中私の部屋に入り浸ってたじゃない」

「あたしはいるよ。ただあの時は、誰よりもキミのそばにいたかっただけで」

「そう……今はもう違うのね」

「ねエ、キミ、レズになったの？」

「いえ」

「じゃあ、何であたしの事引き止めるのサ」

自分でもよく分からない。ただ、今一番そばに居て欲しい相手が陸なだけだ。

そこにレズとか愛とか無理矢理押し込まれても困る。

「キミ、本当に自分勝手だよねエ。気分で振り回して、罵って、離れたと思ったら縋ってくる」

「あんたもそうじゃない。勝手に好きになって、勝手に周り彷徨いて、部屋に入り浸って、他に女が出来たら簡単に離れて行く。薄情よ」

自分が今まで陸をどれだけ振り回してきたかなんて自覚してる。レズの彼女を哀れみ、優越感に浸ってたのだって認める。

正直、陸のいないこの二週間、陸のことを考えすぎて頭がおかしくなりそうだった。

それをこの女が知らないまま、カノジョと乳くり合っていることが堪らなく悔しい。

突然、陸が口を開いた。

「あたしとセックス出来る？」

「はあ？」

「……ごめん。聞いてみただけ」

「……私があんたと寝たら、カノジョの事捨てれるわけ？」

「……」

沈黙。

陸は俯いて、唇を少し尖らせた。

私は暗い空を仰いで真っ白な息を吐く。
そして言った。

「いいわよ別に。今からでも」

「やめようよ……そんな。ちょっと言ってみただけだし」

「本気よ」

「……本当に？」

「怖じ気づいたの？」

陸がじっと私を見詰める。眉間のシワも、真一文に閉じた唇も、必要以上に深刻さを増していた。

陸の手がずっと伸びる。それは私の耳に触れ、近付いてきた彼女の唇が自分の唇に重なった。

私は動けず、膝の上に置いた手をぎゅっと握り締めた。

陸は顔を離すと、クスクスと笑い始めた。

自分の顔が熱くなるのが分かった。

「震えてる」

陸の言うとおり、緊張のため体が小刻みに震えていた。

「無理しなくていいよ。キミはノンケで、あたしはレズ。これは変えようのない事実だし」

「……そうね。無理したかもしれないわ」

私は自分の唇を指先で触れてみた。当然ながら女とキスしたのは初めてだった。

「でも、嬉しいね。死ぬほど緊張した。生きてて良かったよ、ほんと」

大袈裟ね、と私は言った。陸はそれでも笑っていた。そしてその笑い声に、涙が混じっていた。

「ちょっと……なに泣いてるのよ」

私は驚いて陸を見る。長い髪の毛のせいで彼女の横顔はよく見えなけれど、地面に落ちた涙は本物だった。

どうすればいいか分からず戸惑っている私に陸は言った。

「あたしね、昔からこんなだから、普通の恋愛なんて言われても分からなくてさ。初恋は、中学の先輩だった」

「女？」

「ん。まア話しかけることもできず、卒業式に花束渡しただけで終わったんだけど」

「……」

「それから誰好きになっても辛くて、試しに男と付き合ってみたりもしたけど全然駄目だった。未だに処女だよ、あたし。多分、この先ずっと」

「そうでしょうね。でも、仕方ないんじゃない？そういう風に生まれたんだから」

「仕方ない、か……」

「ええ」

「そうなんだよね。そう思うんだけどさ、『仕方ない』じゃ割り切れない部分もあるわけで……例えば、んん、好きな人の子供産む事とか」

「それは……確かに。子供欲しいの？」

「欲しいってゆーか、子供連れの家族とか見たらいいなアーって思うよね。それが手に入らないって分かってるなら尚更。で、何か無性に悔しくて、悲しくなって、あアーもアーってなる。ははっ」

自嘲気味に陸が笑う。

私は何だか胸が痛くなった。

「キミには、一目惚れだった。何か分かんないけど、一瞬で好きになった。あたしの好きでそばに居ただけけど、やっぱり色々考えると、ね。離れた方がいいよなアーって。キミは男が好きだし、多

分将来、普通に子供も産むだろうし。その時あたしはいらないやつて思ってたらどんどん離れなきゃって思ってた。でもね……」

「……」

「キミから連絡来たら出ちゃうし、会いたいなんて言われちゃ飛んで行くしかないし、駄目だね。あたし離れたく、ないです、やっぱり……」

「だから……何で泣くのよ」

戻って来ていいって、私が言ってるじゃない。なのに何で泣いてるのよ。

耳障りなしやつくりと鼻を吸る音。

わけが分からずイラついた。陸の泣く姿なんて見たくなかった。そんなものを見る為に呼び出したんじゃないなかつた。

前みたいに、私の言葉のひとつひとつを拾って一喜一憂する彼女が見たかつた。

そして、出来れば笑って欲しかった。

「また私の所に来ればいいじゃない」

陸は首を横に振った。

「どうしてよ。好きなんでしょ」

今度は深く頷く。

もうわけが分からない。

「好きだから、居られない」

「はあ？」

「だってキミは、時間が経ったらまた他の男を好きになるよ。絶対。そしたらあたしはまた、いらなくなるし。ここで別れなきゃ同じ事の繰り返しだよ」

「そんな事ないわよ。もしそうなくてもあんだとは良い友達で、」

「その残酷さは、天然？」

涙でぐちゃぐちゃになった陸の瞳が私を睨みつけるように見た。思わず言葉を失った。

陸のそんな顔を見たのは初めてだった。

「ねエ、順子さん。あたしの事、解放してよ」

冷たい風が、吹いた。

再び一人になった公園のベンチで、私は電話をかけていた。
8回コールで彼は出た。

「もしもし」

時間は1時過ぎ。寝ていたのか、秀之の声は少しかすれている。

「順子……？どうしたんだ、急に」

「茉莉花と、あれからどうなったの？」

急な話に秀之は『えっ？』と素っ頓狂な声を出した。

「茉莉花とは別れたままだけど……ていうか、今何時？」

「1時25分」

「あ、さんきゅ」

「仕事どうなったの？」

「社長には何とか許して貰って、茉莉花と二度と会わない約束で会社には残してもらえた。で……何の電話、コレ。俺明日も朝早くてさ」

「そう。ごめんね。明日仕事終わってから時間ある？」

「いいけど……本当にどうしたんだよ、突然電話なんて」

電話の向こうの秀之が動揺しているのが分かり、思わず笑みがこぼれた。

陸は公園を去る時、泣きながらこう言った。

『弱くて、ごめんね』

真っ赤になった陸の目を見ながら、きつと明日の朝は瞼が酷く腫れているだろうな、と漠然と考えていた。

みんな馬鹿ね。

でも私が一番馬鹿で——弱いわ。

「私が、茉莉花の代わりになってあげる」

弱い人、と誰かが笑った気がした。

その瞬間脳裏をかすめたのは、陸でも茉莉花でもなく何故か、一条あやねの顔だった。

可愛い女―すみれ、17歳―

この世に確かなものなんてひとつもない。

例えばどれだけ愛の言葉を囁いたとしても、それはその場しのぎの戯れ言でしかないし、人の心ほど変わりやすいものはないのだから。だけどひとつだけ、絶対と言えることがある。

それは私が、美人だということです。

小さい頃はよく芸能事務所から子役としてスカウトされていました。そういう俗っぽいことが嫌いな母親は話もろくに聞かず追い返していたようです。

小学校高学年になると、近所でも評判の美少女だと噂になり、中学に入っただけで、5人から告白されました。

陰湿な女子から嫌われ始めたのもこの頃です。

私はまだ解りませんでした。いつも乱暴な男子達は何故私にだけは優しいのかを。

女の子達はみんな口を揃えて言います。

必ず苦笑いを浮かべて。

「すみれちゃんが美人だからだよ」

高い鼻に白い肌。二重の線がくつきりと緩い弧を描いている母親譲りの目。輪郭はシャープだし、薄い唇から見える白い歯は全て同じ大きさで統一されている。

私は思いました。薄々気付いていたけど再確認しました。

ああ。私はやっぱり、人より可愛いのか……と。

そして今現在、18歳になった私はその自身の美しさをちゃんと自覚した上でそれに相応しい生活をしています。

振った男は数知れず。面倒くさくて途中から数えるのもやめてしまいました。

影で悪口を言う女達のこと、面倒くさくてどうでも良くなりました。

所詮は可哀相な女共の僻みでしかないのだから。

付き合った男は一人だけ。相手は一学年上のトオル先輩。かつこ良くて頭もいい人気者のトオル先輩に告白された時は、嬉しさの余りガッツポーズしたのを覚えています。

だけどいざ付き合ってみると、中身の薄いただの自信過剰な男でした。

お前、俺と付き合えて幸せだな。と言われた瞬間、氷河の如く冷めました。食べていたアイスクリームを投げつけ、それはこっちの台詞だよと捨て台詞を吐き。

バナラ味のそれはトオル先輩の黒い学ランにべったりと張り付き、彼の間抜けさに拍車をかけていました。蝉が五月蠅い8月の公園で、ただ呆然と立ち尽くしていた彼を覚えています。

何とも間抜けな光景でした。

まあ、よく見れば唇の形も変だし鼻も低いし、ペットボトルの飲み方も嫌だったな、とそんなことを考えながら私は一人で帰ったのでした。

全学年の美人ランキングでは、当然の如く三年連続ぶっちぎりの一位を誇っています。ありがとうございます。

私が廊下を歩けば学年問わず誰もが振り返り、男たちは何とか私の携帯番号を聞き出そうと必死なのです。

だけど私は決して媚びたりしません。媚びるのは、中途半端な女のことなのだ。テレビで私の尊敬する某女優が言っていました。男に媚びる女のことを人は、ぶりっこやら、雰囲気可愛いやらと掴みよのない言い方をします。

「なあ、週末暇？」

放課後、上履きからローファーに履き替えている時、その声をかけてきたひとりの男子生徒。

日焼けした肌が男らしい（と勘違いしてそうな）クラスメートです。そいつの目、仕草、喋り方。全てから根拠のない自信満々なオーラが出ているのが分かります。

一般的に見ても私的にも、決まっちゃったいいわけではない。なのにどうしてそこまで自惚れることができるのか理解に苦しみます。

暇じゃない、とそっぽを向くが、馬鹿な男はしつこい。

「旅行、行きたくねえ？それも京都の高級旅館に泊まれるんだぜ」

「はあ？」

「なんなら北海道でもいいぜ。沖縄でも。うちの親父、旅行会社の社長でさあ。金なら全部俺が出すから心配しないで」

「どうでもいい」

これだけ冷たくしているのにすがりついてくる男達はみんな馬鹿です。どうして自分達レベルでこの私を落とせると思っっているのか、不思議でたまらない。

いくら運動ができて、テストの点数が良くても、そんなこと私には全く関係ないのです。要はハートの問題。

ある日の放課後、私は授業で出された課題について調べるため図書室を訪れました。

図書室には誰もいません。

忘れ去られたようなこの空間が私は嫌いじゃないのです。

一人参考書を手にとり、のんびりとイスに腰掛ける。

何の音もせず、誰の声も聞こえない。

木造づくりのこの部屋は、本と檜の匂いがする。

私はそつと瞼を閉じました。無音の中にいる安心感。癒やしとはまさにこの事。

突然、図書室の扉が勢い良く開きました。乱暴な音が静寂を保っていた部屋に響き渡るのを聞いて先程までの穏やかな気持ちが一気に下がった。

入って来たのは、明るい髪色をした一人の男子学生。顔を見た瞬間にピンとききました。

悪い噂しか聞かない人物。

中学の時人を刺したとか、入学当時三年に呼び出されて逆にボコボコにしただとか、九九は5の段までが限界だとか。名前は………忘れた。

同じ学年なのは確かだけど、一度もクラスが被ったことはないのです。相手は私を見ると、一瞬眉をしかめた。

「うおつ。安達すみれじゃん」

いきなり呼び捨てにされ、決して気の長くない私も眉をしかめます。一度も話したことがないのに、彼はどこか敵意を含んだ瞳でツカツカと歩いてきました。腰まで下ろしたズボンが鬱陶しい。

「へえ、意外」

彼が言った。

「勉強とかするんだ」

「悪いの？」

「別に。終わったならどけよ」

……そう、この私に。

「嫌よ」

すかさず私は睨み返します。

彼は益々不機嫌そうな顔をしました。私にこんな態度を取った男は初めてです。

「そこは俺の席なんだよ」

「あんた馬鹿？それともイスに名前でも書いてんの」

「今決めたんだ」

「どうでもいいけど私から一番離れた席に座ってよ」

「うるせえ。いいからどけよ、ブス」

「ブス？あんだ今、私にブスって言った？」

「うん、てめえに言った」

憎たらしいくらいの笑顔。こいつ、ムカつく。

すると彼は私の目の前のイスに座りました。にこにこ笑顔を浮かべているけど、腹黒さが滲み出ている。

「前々からてめえは気に食わなかったんだ」

「そんな風に言われる筋合いはないんだけど」

「気付いてねえの？」

「あんたの名前すら知らないし」

「城戸健介」

「自分から名乗ったくせに、次に私と廊下ですれ違ってもシカトされてもつと傷つくことになるわよ」

「高飛車な勘違い女が」

「あんたこそ調子乗ってんじゃないわよ」

何て嫌な男でしょう、城戸健介。

しかし多分それは相手も同じ。

だけど恨まれる覚えなんてありません。

過去に振った男たちの一人かもしれないと城戸の顔面をまじまじと見てみるけど、ハニーフェイスを気取ったこの男と喋った記憶さえありませんでした。

「お前は」

城戸が口を開いたと思えば、

「性格が悪い」

真っ直ぐした瞳でそう言い切った。

先ほどまで穏やかだった図書室の雰囲気ガラリと重いものになっています。全てこの男のせいだ。
私も負けじと睨みつけた。

「お前は俺の友達に酷いことを言った」

「はい？」

「5組の佐々木って知ってるだろ」

5組の佐々木……ああ、そう言えばそんな名前の奴が前に告白してきたこともあったっけ。

私は拙い記憶を辿ったが顔はおるかどうやって告白されたかも思い出せませんでした。私は記憶力が良い方じゃないのです。

「お前、佐々木の告白になんて返したか覚えてるか」

「覚えてない」

「お前は、こう言っただよ」

『私を好きって？それがどうしたのよ。どうせアンタ、何の取り柄もない馬鹿でしょ。えーっとほら、さっきだって頭悪そうな友達と来てたじゃない』

「……」

暫く沈黙が続いた。

本当にそう返したのか覚えていないけど、私なら言いそうです。

「その時、安達すみれに告白するから着いてきて欲しいと佐々木に頼まれ、そして着いて行ってやったのが俺だ」

「ああ、その、いわゆる……頭悪そうな友達ね」

「デメエ！」

ああ、うるさい。だから馬鹿って嫌いなよ。

「ちょっと、図書室では静かにしてよ」

「ああ、悪い」

「あ、そこは素直なんだ」

「文句あんのか」

「もう、うるさいってば」

露骨に顔を歪めて耳を塞ぐ仕草をした。
とにかく、と城戸健介は立ち上がった。

「男が全員、お前の事を好きだなんて思ってたんじゃないぞ」

「アンタここに何しに来たの？」

「うつせえ！何でもいいだろ！用があったけど、テメエがいたから
帰る！」

「そう。じゃあ気をつけて」

「ほざけ」

来た時と同じように、大きな音を立ててドアを閉め、城戸健介は帰
っていききました。騒がしい男です。知性の欠片もありません。いち
いち声を張り上げ、暴言を吐く。私の一番嫌いな人種です。

そして私は今日も、自分の靴箱に入った女子の仕業であろう『死ね』と書かれた紙を丸めて捨て、道行く男達の視線を奪いながら家路をたどるのです。

可愛い女 2

朝一番に嫌な顔を見た私は思わず声を漏らしました。

「うわ……」

「オイうわって何だ、うわって」

通学中の駅でばったり会ってしまった城戸健介。

まさか同じ電車を使っているなんて知らなかったのです。

それとも、今まですれ違っていたけれど、城戸健介という人間を特に意識していなかったため視界に入らなかったただけなのでしょうか。

何はともあれ、私が無視して電車に乗ると、城戸も続いて乗ってきました。あろうことか私の隣りに立っています。

「ちょっと、」

「あ？」

「違う車両行つてよ。激しく目障り」

「デメエが行けよ」

「嫌よ。この車両が一番改札に近いんだから」

「俺だつてそうだよ」

「じゃあせめて離れてよ！」

「離れてえけど満員で動けねえんだよ！」

「痴漢！」

「殺すぞ！」

後ろに立っていたサラリーマン風のおじさんが迷惑そうに咳をしたことで、私達の言い争いは終わりました。

馬鹿馬鹿しい、と私は城戸を視界に入れないよう顔を背けます。
こんな茶髪馬鹿と一緒にいたら、私まで馬鹿に見られる。それだけは御免なので。

電車が駅に着くと、早足でドアを抜け、アイツの姿を確認することなく改札を出ました。

ああ、今日はろくな事が無さそうだ。

そう思いながら開けた靴箱。

上履きの上にバナナの皮が置かれています。

「……」

どいつもこいつも馬鹿ばかり。

コソコソ嫌がらせするしか脳のないブス共が、せっせと私の靴箱に悪戯しているのでしょう。ご苦労な事です。それにしても、バナナの皮は初めてでした。きっと知能も猿並みなのだと思います。

私はバナナの皮をペツと床に投げ捨て、中に画鋏が入っていないことを確認してから上履きを履きました。この間、画鋏に気付かず履いてしまい、靴下に血を滲ませてしまったので。

普通の人なら毎日毎日繰り返される陰湿な嫌がらせに気が狂いそうになるかもしれません。私は違います。こんな事でいちいち痛める心や、流す涙など持ち合わせていません。

だって私、可愛いもん。

そりゃあ、嫉妬の100や200買っでしよう。時々ブスが羨ましい。だって嫉妬とは無縁ですから。

しかしそれが私の宿命なのでしょう。美しく生まれた者にはそれなりに背負うリスクがあるのです。そう考えると、人生って平等ですよ、いや、それはない。やっぱり世の中顔だと思います。

「おい！城戸！」

移動教室への最中、廊下中に響き渡る馬鹿デカい声。

誰もが声のした方を驚いて振り向くとそこには、生徒指導の田淵に首根っこを掴まれている体育のジャージを着た城戸健介の姿がありました。

「んだよ、うるせーな」

ふてくされた様子で城戸が言つと、田淵は顔を真っ赤にしてまた怒鳴りました。

その周りでは、城戸の友達と思える数人の男女がニヤニヤしながら、城戸をからかっています。馬鹿は友達が多いのです。

「城戸お前、昨日図書室の掃除サボって帰っただろう！」

「サボってねエーよ！ちゃんと行ったわ！」

「嘘つくな！」

「嘘なんてついてねえ……」

パツと城戸と目が合いました。

わざと意地悪く、にやっと笑ってやると（多分この顔すら可愛い）彼の眉間にシワが寄りました。

「あ、安達すみれ！なアなア、昨日図書室で会ったよなア！」

馴れ馴れしい、と私は舌打ちしたくなるのを抑えました。

城戸の一言に廊下がざわつきました。誰もが私と城戸を交互に見ています。

こんなアホと友達だなんて思われたらたまったもんじゃありません。

「安達、本当なのか？」

田淵先生までが、半信半疑という表情で私に話を振ってきたので逃げられなくなりました。くそ、余計な事を。

「…… 本当です」

周りの生徒が『え！安達さんと城戸って仲良いの！』という顔をしているのが分かり、血の気の引く思いです。

城戸が安心したように息を吐きました。

私はにっこりと満遍の笑みで田淵先生に笑いかけて言いました。

「でも城戸くん、私に散々暴言吐いてから何もせずに図書室から出て行きましたけど」

「なにイ！本当か！」

今度は皆、『えっ、あの安達さんに暴言を！』という表情で城戸を見ました。単純な人達だな、といつもながら思います。ですが、単純こそ幸せだということを私は知っているので、羨ましいとも感じます。

生徒指導室へ連行されてる城戸を見送りながら、私はこっそり呟きました。

哀れな奴、と。

私は何事もなかったかのように踵を返し、科学の教科書を抱えて次

の授業へと向かうのでした。

「全員揃ってんなー」

理科実験室の教壇に立った江奈先生（27）は、気だるそうにそう言いました。

無造作な髪の毛に少し垂れ目がちの目。背は高く痩せ型のスタイル。白いシャツの袖を肘まで捲った江奈先生は、同世代の猿に毛が生えたような男の子達とは違い、男の色気がムンムンと漂っています。

その姿に今日も見とれ、思わず熱い溜め息を吐きました。

そう、私は今、恋をしているのです。化学の教師、江奈紀一先生に。だから化学の授業がある日は風邪を引いたって絶対に休みません。

無気力・適当・女好き（但し20歳以上の女に限る）が江奈先生の代名詞。

だから授業に遅刻してくることも少なくないし、いつも授業終了のチャイムが鳴る五分前には必ず終わります。

でも他の先生達とは違い、スカートが規定よりも短い女子やピアスを開けた生徒を怒鳴るなんてつまらないことはしないし、細かい事も気にしないので男女問わず人気があります。

「じゃあ、先週やったテスト返すからな」

江奈先生はそう言って、束になった全員分の解答用紙を見せ、順番に名前を呼び始めました。

「俺、今回点数良かったらー！」

クラスのお調子者、秋田君が一番後ろの席から叫びました。

先生は溜め息混じりに秋田君を呼ぶと、その長い指に挟んだプリントを渡しました。

「テメコノヤロ秋田。全然最悪だったわ」

「嘘だあ……げえ！55点！赤点ギリギリじゃん！まじやべー親に殺される！」

「な、やべーだろ。やべーんだよ、ホント。俺の立場もねーから。校長に殺されるから。頼むからちゃんと授業聞け。次、安達ー」

「はい」

私は両足を地面にしっかりとつけ、真っ直ぐ江奈先生の方へ向かいます。

私は、江奈先生が私の名前を呼んでくれるだけで胸が切なくなるのです。ああ、緊張で手が震える。

江奈先生の目の前に立って恐れ多くもその顔を見上げました。この高校に入学して3年目、見慣れた筈なのに、どこか上品で端正な顔立ちに私の顔が熱くなります。先生の伏せた瞼から伸びる睫に近い視線をとられました。

「ん、」

先生の手からそれを受け取り見れば、プリントの右端に赤い百点の文字。嬉しさの余り、やったあ……と小さく呟くと、頭の上に影ができました。

「安達だけだわ、優秀なのは。まじで」

にこりともせずそう言った先生の大きな手が、ふわりと頭に乗りました。

息を止める。体が動かない。呼吸困難になるかと思うほど。みるみるうちに顔が赤くなつていくのが分かり慌てて俯きました。

嫉妬に駆られた男子達が『江奈ちゃん、安達さんにセクハラすんなー』と野次を飛ばしてきます。

この学校にいる生徒達のほとんどは男女問わず、江奈先生のことを『江奈ちゃん』と呼んでいます。

江奈先生の教師らしからぬ風貌と、誰に対しても平等で友達のように気軽な性格がそうさせるのでしょう。

だけど私は、『江奈ちゃん』なんてふざけた呼び方は絶対にしません。他の皆と同じ事をしていては意味がないのです。

男子達から投げられる嫉妬の言葉と、女子達の白けた視線が突き刺さる中、先生は私の頭に置いていた手をどけて面倒くさそうに首を掻きました。

「うつせーガキ共。頭撫でて欲しかったら百点取りやがれ。あと俺がセクハラしてえのは釈由美子だけだ。はい次、石川ー」

授業が終わり、クラスメートは全員実験室から出て行きました。昼休みで購買に走る者が多かったので、あっという間に私一人になり、

それが好都合でした。

先生はいつも授業が終わると奥の準備室にいます。
私はノックをしてから準備室に入りました。

「あの、江奈先生」

「あ……なんだ、安達かどうした」

江奈先生が少し焦ってこちらを振り向きました。

その薄い唇にくわえている煙草からは既に細い煙が上がっています。
火災報知器に引っかかるからないう、窓を開けて煙を逃がしているところでした。

「あの、」

私が口を開いた瞬間、準備室のドアが大きな音を立てて開きました。
驚いて振り返ると、天敵城戸健介が立っています。

「あ！安達すみれ！」

「……」

え、デジャブ？図書室プレイバック？

愛の告白を見事邪魔された私は怒りすら通り越し、ただ呆然と目の
前の空気が読めない男を見ていました。

城戸健介はそんな私の心境など何も分かっていない様子で通り過ぎ、
真っ直ぐ江奈先生の元へ駆け寄りました。

「江奈ちゃん、お願いがあるんだけど」

「何だ城戸か。どうせ成績上げてくれとかそんな事だろ」

「おいしい！今度の補習見逃して！」

「無理。今回赤点なのお前だけだぞ」

「じゃあいいじゃん！江奈ちゃんも補習なんてするの面倒くさいだろ」

「やらねえと上からグチグチ言われんだよ。遊んでねえで真っ直ぐ家帰って進研ゼミでもやってるバカヤロ」

「ケチ！準備室でいつも煙草吸ってること他の先生に言っぞ！生徒に悪影響だ！」

「……」

学期末テストで40点以下の赤点を取った生徒は、一週間の補習授業があるのです。

しばらく睨み合う二人でしたが、江奈先生が仕方なさそうに煙草を消しました。

「しゃーねえな。今回だけ特別だぞ。俺も正直だるいし」

「やったー！さすが江奈ちゃん！」

「サービスで3日にまけてやる」

「え……」

「そんで教えるのは俺じゃなくて、」

忘れられたように突っ立っていた私を江奈先生が見ました。嫌な予感に汗を滲ますと、江奈先生の口端がにやりとつり上がります。

「安達、よろしくな」

ああ……その笑顔が眩しい。

可愛い女 3

これが他の先生からの命令なら間髪入れずに断っているところですが、世界一愛しい人の頼み。断るわけにはいきません。それに、これを機に江奈先生からご褒美が貰えるかも…なんていう邪な考えに至り、私は3日間だけ城戸の補習相手を引き受けたのです。

「あー。腹へったわ。まじで。ねみーし。この教室あちー」

「……」

目の前の馬鹿は予想以上の馬鹿でした。

先程から文句を言うばかりで一向に終わる気配のない課題プリント。私は何度ため息をついたでしょう。

「さっさと解いてよ。帰れないじゃない」

「んー」

「これがあと2日も残ってるなんて地獄」

「うつせーなあ。今考えてんだろーが。口うるさい女は好かれねぞ」

「大丈夫。あんただけには死んでも好かれたくないから」

「大丈夫。もし世界で俺ら二人きりになってもお前だけは抱かねえ。それくらい嫌いだから」

……死ね。

しばらく流れた沈黙。

時計の針がカチカチと異様に響いています。

目の前の城戸は相変わらず頭を抱えたまま動こうとしません。

もう5時45分。夏の夕方は、まだまだ暗くなる気配がなく、誰もいない教室と、静かな廊下。

少し、図書室にいる時の感覚に似ているかもしれません。

城戸の茶髪が、窓から入ってきた風に揺られるのを見ました。同じく私の髪も。

ああ、そうか、同じ空間にいるからか。と、当たり前することにハッとしました。

そういえば、誰かとこんな風に向き合ったのは初めてかもしれません。こうやって、自分以外の人と教室に残ったり、喧嘩をすることも、勉強するのも。だって私は……

「できた」

突然かけられた言葉。気付くと気だるそうな顔した城戸がプリントを私の方に差し出していました。

「あ、うん……」

それを受け取り、採点していきます。ほぼ不正解でした。

「あんた、本当に馬鹿なのね」

呟くように発した言葉に、城戸は反論してきません。

どうしたのだろうと顔を上げると、頬杖をついた城戸と目が合いました。私が採点している間、ずっとそうして見ていたのでしょうか。驚いて反射的に視線を反らしてしまいました。

「お前さあ、何でいつも一人なの」

馬鹿にしているわけでもなく、心配してる風でもない。純粹に疑問に思ったから尋ねてきたのでしょうか。

「別に。友達なんかいらない。面倒でしょ。自分のこと話したり、相手のこと聞いたりするの」

「だから誰ともつるまねーの？」

「うん」

ふうん、と城戸が息を吐く。

少し微笑んでから彼は言いました。

「強いね」

「別に……」

別に……なに？

自分で言ったそのあとの言葉が続かずに口を閉ざしました。城戸は

それ以上何も言いませんでした。

やっと城戸が全問解けたのは辺りがすっかり暗くなってからでした。意外なことに職員室に江奈先生の姿があり、つい胸が高鳴りました。江奈先生の性格的にさっさと帰っていたのかと思っていたけれど、どうやら先程までほかのクラスの生徒から恋の相談を受けていたらしいのです。絶対女子だ。チッ。

「んじゃ、もう帰っていいぞー。安達、ありがとうな」

「いえ……」

「あ、城戸。もう外暗いからちゃんと安達送ってってやれよ」

「へいへい」

何て優しいんでしょう、さすが江奈先生。女子への配慮完璧です。それに比べて茶髪馬鹿はひとりさっさと職員室をでてった行きました。

「江奈先生、あの……」

「ん、どうした安達。やっぱり補習の手伝いなんて嫌か？」

「いえ……その、」

「お前も悩み事か？女の子は大変だなあ」

「……何でもありません。失礼します」

きょんとする江奈先生をあとに、私も職員室を出ました。

廊下には誰の姿もありません。あいつは私と同じ電車に乗りたくなくて、先に帰ったのです。好都合でした。私も城戸と一秒でも長く同じ空間にいたくないので。

下駄箱につづく階段を降りながら、先程まで見ていた江奈先生の顔を思い出しました。

江奈先生に相談したという女子は、一体何を相談したというのでしょうか。

毎日靴にゴミや画鋏や死ねと書かれた紙が入っているよりも深刻な悩みでしょうか。

「言えなかった……」

つい声に出してしまいました。

私と江奈先生以外誰もいない職員室。告白するには絶好のチャンスだったのに、フラれたら次に行けばいいだけなのに、好きですと言えなかったのです。この私が。

どうしてなのか考えても分かりませんでした。分からないまま下駄箱へ着きました。

「おせーぞ」

靴箱にもたれかかってズボンのポケットに両手を突っ込んで立っている城戸がいました。

彼はもうスニーカーに履き替えています。私を待っていた？はっ。

まさか。

「先に帰ったと思ってたわ。というか、そうしてほしかったけど」

「いや、さすがにもう暗いし」

「ふうん。あんたでもそういう気も遣えるのね」

城戸が嫌な顔をしました。私は気にせず自分の靴箱に向かいます。そして靴を取り出した瞬間、どここの身の程知らずが書いたか分からないラブレターがひらひらと地面に落ちました。城戸が興味深そうにそれを拾ってまじまじと見つめました。

「おーラブレター。お前何でもてるんだろうな。誰よりも性格わりーのにな」

「誰よりも可愛いからよ」

私はラブレターと城戸を一瞥してからローファーに履き替えました。そして、おや、と首を傾げました。

いつもお約束のようにあるはずの嫌がらせが今日はないのです。

「なあ、これ誰が書いたか見てみようぜ」

「え？あぁ……」

彼女たちは低レベルな嫌がらせに飽きたのでしょうか。私が何も反応しないことに。

城戸が面白そうに封筒を開けました。中から手紙を出てきます。

胸騒ぎがしました。

「……やめて！」

私がそう叫んだのと、城戸が手紙を開いたのは同時でした。そのあとすぐ、城戸の顔が強張ります。ああ、やっぱりかと私は思いました。

「……名前書いてねえわ。つまんね」

城戸はそう言っただけで手紙を封筒に戻しそのまま小さく丸めて自分のカバンに入れました。そして、早く帰ろうぜとさっさと歩き始めます。

「なんて書いてたの」

「知らね。ちゃんと見てねーし」

「返してよ、私のよ」

「嫌だ」

「いいから。別に今更、傷付いたりしないから」

そう言うと、城戸は歩みを止めてゆっくりとこちらを伺うように振り返りました。

「返して」

もう一度、今度は先程より強いきました。城戸は少しの間躊躇し

たあと、ぐちゃぐちゃになった封筒を私に差し出します。

私はそれを受け取り、丁寧に開きました。

死ね。

いつもと同じ文字が赤のマジックペンで大きく書かれています。

そして封筒の中には、ご丁寧にカッターの刃先が入られていることに気がつきました。

私はこのことよりも、これを城戸のような男に見られたことを恥じました。

「これで死ねって？下らないわ」

そのまま歩いて近くのゴミ箱に投げ捨てました。

城戸は何か言いたげに私を見ています。私はいつも通りの表情で、髪を左手で靡かせてから下駄箱を出ました。

「お前、いじめられてんの？」

ああ鬱陶しい。

「馬鹿言わないで。いじめられてるのはブサイクに産まれてきた彼女達の報よ。本当にブスって、哀れだわ」

「誤魔化すなよ。いつからだよ。俺からやめるように言ってやろうか？」

「あんたに関係ない」

「でもあんなの酷すぎるだろうが。カッターまで……」

「忘れて。誰かが気にしていると私まで気にしなきゃいけないでしょ。大丈夫なのに」

「大丈夫って？そうは見えねえな」

「大丈夫だってば。大丈夫じゃなかったら私、まるで可哀想な子みたいじゃない」

私は絶対に、可哀想じゃない。

自分で自分を可哀想なんて思わない。だって、美しいもの。可哀想なわけではないもの。

城戸がよく分からない、微妙な表情をしました。泣きそうなのか、怒ってるのか。そうだとしたら、なぜ彼がそんな感情にならなければいけないのか。

でも私は分かっています。城戸は私に同情しているのです。こいつみたいな人間はたくさんいます。人の粗に首を突っ込んできて勝手に大騒ぎする、友達も多くて明るい性格の偽善者なのです。

「安達、」

「なに」

「お前、泣いたことある？」

「ないわ。哀しくて泣くのはブスの役目でしょ」

城戸を振り切るように私は走りました。同じ電車に乗らないように。

泣いたことある？――

どうして城戸はそんなことを聞いたりしたのでしょう。

ああ、見られなくなかった。

だって私はこれしかない。

この美しい顔しか持っていない。

他には何も……ない。

可愛い女4

今まで憂鬱な朝は腐るほどありましたが、こんなにも気が重いのは久しぶりでした。しかし学校を休むわけにはいきません。城戸に変な誤解をされては、かないませんから。

幸いにも電車で城戸に会うことはありませんでした。とりあえず穏やかな朝です。

そう思いながら改札を抜けた時でした。向こうから走ってきた女の人のハンドバッグが私の左半身に思いつきりぶつかったのです。

彼女は慌てて電車に乘ろうとしていたでしょう、しかしその拍子に彼女の手からハンドバッグが離れ、中身をぶちまけながら地面に落ちました。

あ、と声を合わせて私達の視線が交わりました。

電車は無情にも行ってしまい、通勤中のサラリーマン、OLに白い目で見られながら私と女の人はハンドバッグから飛び出た様々なものを見下ろしていました。

「ごめんね」

女の人は無表情でそう言うと、しゃがみ込んでひとつひとつ拾い初めます。私も同じように、かなり遠くまで飛んでいってしまった彼女の妊娠検査薬を拾いました。

「ありがとう」

まだ封の開いていない妊娠検査薬を受け取った彼女。その顔は、決してずば抜けて整っているわけではないのですが、ど

こか惹き付けられるものがあり、その瞬間私は初めて自分以外の女を綺麗だと思ったのです。

私よりもせいぜい3つくらい年上なのでしょうが、まるで世の中の総てを見てきたような彼女の目だけが
若い印象を与えませんでした。

そしてよく見ればブランド物で固められた身なり。その風貌は分かりやすいほどに水商売の女のそれでした。

「学校、遅れるよ」

にこりと笑って彼女は私に背を向け、改札を抜けていきました。

風に靡いた彼女の金髪からは甘い匂いがしました。

いつも通り、私は幾人もの男子生徒の視線を浴びながら校舎へ入りました。

廊下に溜まっていたのは、城戸とその愉快的な仲間達。男女合わせて5人くらいでしょうか。

咄嗟に顔を伏せてしまいました。

しかし教室に行くには彼らの横を通らなければいけません。遠回りしてでも別のルートから行こうとも考えましたが、なぜこの私がこそこしなくてはいけないんだろうと思ひ直し、堂々と通る方を選びました。

城戸の視線を感じました。しかし彼は話しかけてきませんでした。ホッとしたような、少し拍子抜けしたような。私が思っているほど、城戸は昨日のことを重くとらえていないのかもしれないかもしれません。

教室に入ると、あちこちでお喋りをしていた女子達の悪意ある視線が突き刺さりました。いつものことです。気にせず自分の席につきました。

幸いにも、すぐに本鈴が鳴りました。皆だらだらと自分の席に戻ります。

「ねえ、あいつ昨日城戸と……」

「まじ？城戸狙われてんの？ショックー」

微かに入ってくる女の子達の囁き。
ああ、やっぱりアイツは疫病神だ。

「安達ー！行こうぜ！」

まだ何人も生徒が残っている放課後。

当たり前のように城戸が私の教室のドアを開けました。

私は無視して、城戸をいないものとして扱いました。周りのざわつきさえ無視し、淡々と帰る準備をしました。

常に人の輪の中心にいる城戸と、その輪から外れている私が一緒にいるところを見られてもメリットなんて皆無なのです。

「城戸、安達さんと帰るのかよ」

「ちげーよ！補習付き合ってもらっただけ！」

「まじ？いいなー！俺も赤点取れば良かった」

「嫌味かデメエ」

他の男子と話している城戸の横をすり抜け廊下に出ました。
すかさず追いかけてくる馬鹿。

呼ばれても振り向きませんでした。

そのまま、昨日と同じ空き教室に到着しました。私に続いて城戸も教室に入り、私たち以外誰もいないことを確認してから振り返ると、間抜けな顔した城戸と目が合いました。

「なにシカトこいてんだよ」

「馬鹿じゃないの。迷惑なのよ、ああいうの」

ああいうの？ とキョトンとした様子で彼は首を傾げます。ああ、余計イライラする。

「誰かの前で私の名前を呼ばないで」

「はあ、めんどくせー。何だそれ。友達の名前呼んじゃいけねーのかよ」

「友達？誰が」

「俺とお前。あれ、違ったっけ」

反射的に城戸の頬を叩いていました。
乾いた音が教室に響く。

「あんたと友達だなんて思われたくない」

どうしてこんな言葉が口をついたのでしょうか。
みんな馬鹿だ。
瞬間、なぜか私はそう思いました。

「……いてえよ」

色のない瞳で彼が言う。怒鳴るわけでもなく、ただ少しだけ悲しそうに。

初めて人を叩いた自分の手のひらの痛みに耐えられず、私は教室を走って出ました。

城戸は追いかけて来ませんでした。

江奈先生に会って、何を話そうと思ったわけじゃありません。このまま帰りたくなくて、足は自然に化学準備室へ向いていました。
準備室のドアの前に立った瞬間、まるで合わせたように中から江奈先生が出てきました。

「おっ、なんだ安達か……って、え？」

「……」

私は泣いていたようでした。一番見られたくない顔を一番見られたくない人に見られた恥ずかしさからつい顔を背けて、何も言わずに去ろうとしたけど、江奈先生の大きな手がそれを制止しました。

「なんですか」

「いや、何ですかじゃねーよ。何かあったから来たんだろ。今俺もちようどお前らの補習見に行こうとしてたんだ。城戸と喧嘩でもしたのか？」

「……」

答えないでいると、江奈先生は困ったように頭を掻きました。これが喧嘩、なのでしょうか。言葉が見つかりません。

「とりあえずどうする？今日はもう帰っていいぞ」

「……」

「何か言いたいことがあるなら、まあ一応聞くけど……あんまりキツイのはやめてな」

江奈先生はそう言って私を準備室へ入れてくれました。微かに煙草

のにおいがします。

江奈先生は、小さなパイプ椅子を2つ向かい合わせにして置きました。私は無言でそれに腰かけます。

「で、なんで泣いてるわけ？城戸に襲われたんじゃないだろうな」

「いえ……」

江奈先生を前にすると、不思議と涙は止まったようでした。私は袖で自分の臉を何度かこすり、小さく息を吐きました。

「私が城戸を叩いたんです」

あー、と江奈先生が苦笑いを溢します。

「……気の強い美人は魅力的だな、安達。女からのビントは結構へこむんだぞ。男は弱いから」

「すみません無意識で」

きつと江奈先生もそういう経験があるのでしょうか。
女好きで有名な江奈先生なら素直に頷けます。

それで、と江奈先生は椅子に深くもたれ掛かりました。

「何で叩いた？猿共の憧れ安達すみれが泣くほどあの馬鹿に傷付けられたか」

傷付けられた。

確かに、そうかもしれない。

「城戸が、言ったんです」

「なにを？」

「私に、友達だって」

「ともだち？」

「……はい」

友達なんて、いなかった。

女の子は私のことが嫌いだし、男の子は優しいけれど、誰も私を友達として扱ってはくれなかった。

私はみんなのように大声で騒げる性格ではない。話を振られても必要最低限のことしか答えられない。

言い寄ってくる男の子に冷たくすれば女の子の友達ができるかもしれないと思っただけ、高飛車だと、言われて余計に疎外された。

男の子達はみんな私に視線を向けるけれど、いざ付き合えば退屈な女だと思われることも分かっている。人形みたいだ、と中学生の頃私に向かってそう言ったのは誰だったろうか。もう、忘れてしまった。

気付けば、私はみんなにとって腫れ物になっていた。

私はただ、方法を間違えただけなのに。

美しく生まれた者へのハンデだと、言い聞かすようになったのはもうずっと昔だ。

でも、城戸は私を友達と言った。その一言は確かに痛かった。諦めたものを簡単に目の前でチラつかされて腹が立った。だから思わず叩いてしまった。

「いえよ、と言った城戸。」

痛いのは、私が叩いた頬のことだろうか、それとも。

「……江奈先生、城戸は、傷付いたでしょうか」

私がそう聞くと、江奈先生は考えるように少し間を置いてから優しく笑いました。

「どうだろうな、あいつは傷付くっていうより困ってるんじゃないか？」

「そうですね……」

「安達、何利き？」

「右です……」

そう答えると、江奈先生の温かい手が私の右手に触れました。城戸をぶったこの右手に。ああ、どうしよう。胸が張り裂けそう。

「城戸を叩いた時、手、痛かったろ」

低い声で江奈先生がそう言います。私は素直に頷きました。でも叩いた後……いえよ、と彼が言ったあと、痛かったのは自分の手だけじゃなかった。心が、心臓が、千切られたみたいで吐き気

がした。

「人を傷付けるってのは、そういうことなんだ。相手も傷付くけど、同じように自分も傷付いてる」

「……」

「安達を故意に傷付けた奴がいたとしたら、そいつも知らずに同じ傷を負ってるもんだ。俺の言ってる意味、分かる？」

な、と江奈先生が私の後方に視線を送った。

まさかと思い振り返ると、気まずそうにした城戸がドアにもたれかかって立っていた。

もうとつくに帰ったと思っていたのに。

「悪かったよ」

城戸が言いました。どういう意図で言ったのかはよく分からないけど、彼は本当に申し訳なさそうな表情でした。そして少しだけ膨れっ面です。

私は返事に戸惑いました。もしかしたら、私も謝らなくてはいけないのかもしれない。でも、言葉がでない。叩いてごめん、ただそれだけなのにどうしても言えない。

生唾を飲みました。城戸がその言葉を待っているような気がしたのです。言わないと。でも、ダメだ。恥ずかしくて、ごめんが言えない。

「うし、めんどくせーし今日はもういいや。お前らさっさと帰れ帰れ」

「え？」

「いや、俺も予定あるから。そのかわり明日はちゃんとやれよ、城戸。安達は……暇だったら手伝ってやってな」

「……」

あーだる、と呟いてから江奈先生は私達を外に出しました。私が黙りこんだから、空気を変えてくれたのです。

そうです。私は江奈先生の、こういう、見せない優しさが好きなのです。

あつという間に閉め出された私達は気まずさ故にどちらも口を開きませんでした。が、業を煮やした私はわざとふてぶてしく言いました。

「帰ってると思ってたわ」

「帰れるかよ、泣いてんのに」

「泣いてない」

「泣いてただろ」

「うるさいわね、泣いてないっていったら泣いてないのよ」

「……かわいくねー女」

「……」

「別に、笑ったりしないのに」

城戸はそう言っ て目を伏せました。

「あんたが泣いたら私は笑うわよ」

ああ、また私、こんな言葉を。

すっかり染み着いてしまった私のひねくれた性格はなかなか直らないみたいです。

だけど城戸は怒りませんでした。

それでいいよ、と尻を下げて笑ったのです。

可愛い女5

煙草の残り香と、アルコールランプの匂い。混ざりあって、なんだけ変な感じ。

私は一瞬だけ目を閉じて、彼の言葉を聞きました。

「そうだな、安達があと3年、早く生まれてたらな。悪いな」

白衣を着たままの江奈先生は、けたけたと笑いながらそう言いました。

ショックなはずなのに何故か心は穏やかです。

昨日で何かが吹っ切れた私は放課後になるのを待ってから準備室に向かい、江奈先生を捕まえるや否や告白したのです。そして冒頭に戻るのです。

「分かりました」

「え、それだけ？」

「はい」

「ふーん……」

「失礼しました」

丁寧に頭を下げて、自分でも驚くほどあっさり事を終えました。子

供に興味のない江奈先生のことです。どうせ無理だと分かっています。でもひとつ納得いかないのが、ふられたというのにひどく穏やかな自分の心境です。

私はその足で三階へ続く階段を駆け足で上りました。寒い廊下を早歩きで渡り、空き教室のドアをそっと開けると、机に突っ伏して寝ている城戸の頭がありました。

「なにサボってんのよ」

近づいてそう言うと、勢いよく頭を上げる城戸。私の顔をまじまじと見つめてから、何かを確認するかのようにため息を吐きました。

「何で来たんだよ。来なくていいって、昨日言っただろ」

不貞腐れた様子で再び彼は顔を背けます。城戸の丸まった広い背中を見つめながら、私も前の椅子に腰掛けました。

冷えきった座面が不快で思わず眉間に皺を寄せました。

「……そうね。何でだろう」

「……」

城戸は顔を上げません。

今彼は、どんな表情をしているのか気になって、その髪の毛を掴んで無理矢理起こしてやりたい衝動に駆られましたが、もちろん理性で抑えました。

城戸が何も反応を示さないので、私はただ呆然と窓の外を見ていました。隣の校舎で走っているのは一年生でしょうか。風がびゅーび

ゅーと音をたてています。 ああ、今この窓を開けたら寒いだろうな。

ふと、昨日駅でぶつかった女の人のことを思い出しました。

何か底知れない、深い瞳をした女だった。

彼女は私から妊娠検査薬を受け取った時、笑っていたけど本当にそうなのだろうか。

あれからあの妊娠検査薬は使われたのだろうか。結果はどうだったのだろうか。それを見て彼女は、泣いたのだろうか。

そんなことを考えていると、何だか勝手に悲しい気持ちになりました。 私にはあの時の女が、幸せな出産を望んでいる種類の女にはどうしても見えなかったのです。 ただの、勘違いかもしれないけれど。

「ねえ……寝たの？」

やはり反応はありません。 ぴくりとも動きません。 城戸の腕の下にある補習プリントの解答欄は真っ白なままです。

「私、さっき、江奈先生に告白したの」

「えー！」

城戸が勢いよく身体を起こしたものだから、がたん、と机が揺れました。 やはり起きていた。

「まあ、ふられたけど」

「お前、江奈ちゃんのこと好きだったのかよ」

私が頷くと、城戸はなんとも言えない微妙な苦笑いを溢しました。

呆気にとられた、というのはまさに今の城戸のような表情を指すの
でしょう。

私はなんだかおかしくなって、誤魔化すために咳払いをしました。

「なんで江奈ちゃんなわけ？」

「さあ。みんなと違って。大人だったから。でも、不思議ね。失恋
って、もう少しショックかと思っていただけ」

「まあ、お前今まで散々振ってきたんだから一回くらい振られたっ
ていいだろ」

「失恋した女の子に言う台詞じゃないわよ」

「相手がお前じゃなきゃな」

「ねえ、なぐさめてよ」

「はあ？そんな柄じゃねーだろ」

「……」

「……ファイト」

「なぐさめられないわ」

「頑張れ」

「さっきと変わらない」

うつせーなーてめーはよー、と馬鹿っぽい言葉を吐きながら、城戸は椅子の背もたれに体重を預けた。

私がしばらく何も言わずにいると、彼は少し咳をしてから手持ち無沙汰でシャーペンを意味もなく弄っています。

何を言うのかと思えば、さっきとはうって変わって小さな声で彼が言いました。

「安達は、可愛いよ」

「……」

根性のひねくれた城戸の口からまさかそんな言葉が出るとは思わず、何も反応できずにただ彼の耳の後ろで無造作にハネた髪の手を見えていました。

すると城戸も自分で言っただけ居心地が悪くなったのか、変な沈黙が流れました。

「見てんじゃねーよ」

「見てないし」

「……………見てんじゃねーよ」

「……………見てないし」

城戸がチツと舌打ちします。まさか、照れているのでしょうか。

誰かの笑い声がして、思わず窓の外に視線を送りました。きつと裏庭の方でしょう。

次第にその声が聞こえなくなると、教室の中は一層静まり返ったように感じました。

可愛いよ、と言った城戸。

そんなこと分かっている、と思いました。

それどころか今まで耳にタコができるくらい言われ続けて慰めの足しにもならないと思いました。

そう、思った。確かに思ったのですが言えませんでした。なぜなら、その一言がとてつもなく嬉しかったからです。

どうしてでしょう。なぜでしょう。今までそんなことは何人もの男から言われてきたのに。城戸が言うのと全く別の言葉に聞こえたのは一言が、こんなにも意味を持つなんて私は知らなかったのです。

（ふられてもへこまないわけだ……）

そう、私はきつと、いつのまにか城戸のことを好きになっていたのでしょう。全然タイプじゃないけど。

江奈先生は所謂、憧れの存在だったのです。

あの時、職員室で二人きりになれた時、どうして告白できなかったのか分かりました。

江奈先生に自分の気持ちを伝えてしまったら、学校に来る口実がなくなると思ったのです。

たった一人で学校に通うというのは、とても勇気のいることなのです。私は江奈先生が好きだと思い込むことで、学校に通う理由を作っていたのかもしれない。

西日が目に入る。ああ、眩しいな。

「私のこと嫌いだったんじゃないの」

「可愛いと好きは別もんだろ」

「……なるほどね」

今度は反対に胸がチクチク痛みます。全く恋ってやつは忙しい。

「あんたいちいちム力つくわね」

「お互い様」

「でも、当たってるわ」

「なにが」

「男の子達は私の顔を好きだと言ってくれるけど、誰も私のことを好きだとは言わないもの」

城戸も他の子達と同じなのです。でもそのことで城戸を責めることはしません。それが私の世界では普通なのだから。

誰もこんな可愛いげのない女を好きになるわけなのです。別に卑屈になっているわけではありません。世の中にはまだまだ出会っていない人が沢山います。一人でも、このままの私を好きだと言ってくれる人がいれば、それでいいのです。

「まあ、お前性格悪いからな」

爽やかな笑顔。とことんム力つく奴です。早くもこの感情は勘違いではないだろうかと思い始めてきました。

「でも、いいところもあるよ」

「どういふところよ」

「今日来てくれただろ」

「それってどういう、」

「……さあ」

言葉を濁す城戸。私から背けられた城戸の横顔がオレンジ色に染められました。

「帰ろう。なんか、勉強する気分でもねーし。これは家でやって明日持ってくる」

「あんた一人で行けるの？」

「なんとかなるだろ」

「ふーん」

城戸はプリントを無造作に鞆へ突っ込むと、早々に立ち上がりまし

た。

私は帰りたくなくて……というか、もう少しこのまま話していたかったのですが、なにも言えずに同じく立ち上がって教室を出ました。

「さみーな」

「うん」

下駄箱までの会話はそれだけでした。何だか話が続かなくて居心地が悪い。

憂鬱な気持ちで自分の靴箱を開けましたが、幸いにも今日は手紙一枚ありませんでした。

「どうした？」

先にスニーカーに履き替えた城戸が尋ねてきます。何でもないと、言って上履きを靴箱に入れました。

私の斜め前を歩く城戸。校門を出るとき、グラウンドで練習しているサッカー部が視界に入りました。こんな寒い日に汗をかいて走り回っています。

城戸との補習も今日で終わり。言ってもちゃんと勉強したのは一目だけで、決して楽しくもなかったけれど、何だか寂しく思うのは気のせいでしょうか。

明日からは目も合わせないかもしれない。これまでそうだったように。だって城戸の持つ世界と、私の世界は全く別物なのだから。そう思うと、無償に叫びだしたい衝動に駆られました。

そして叫ぶ代わりに、城戸の背中に向かって言いました。

「ねえ、さっきのもう一回言ってよ」

振り向いて立ち止まった城戸。

自然と私の足も止まります。

「あ？さっきのって？」

「だから……慰めてくれたでしょ」

城戸は分かったのか、即答でやだよと答えました。

「いいじゃない、減るもんじゃないし」

「そついう問題じゃねーだろ」

城戸は歩きだそうとしましたが、私は頑として動きませんでした。
可愛いよ、と言った城戸の言葉をもう一度だけ聞きたいと駄々をこねる私はものすごく子供っぽくてこっ恥ずかしい女なのでしょう。

「お前も頑固だな」

呆れたように彼は言いました。

木枯らしが足元を冷やします。私は緊張しているのか、自然と拳を握っていました。自分が何かに対してこんなにも必死になったことが、今まで一度でもあったでしょうか。

城戸の瞳が真っ直ぐ私を見つめています。

自分で話を振っておきながら逃げたくもなりましたが我慢して待ちました。

だって、目の前にいる彼はまだ何も、

「安達、好きだよ」

……言った。

あれから3日が過ぎました。私達が付き合ったのかと言えばそうではなく、どちらも曖昧なまま学校生活を送っています。

ただひとつだけ変わったのは、私への嫌がらせがぴたりとなくなったこと。私を誘ってくる男の子の数が激減したこと。

その代わり……

「よう安達ー、次移動どこ？」

「数2の教室」

「俺英語だから途中まで行く」

城戸と一緒にいることが多くなっただくらいでしょうか。

「今日帰りラーメン食ってこーぜ」

「あんた今日委員会じゃなかった？」

「うわ！忘れてたわ」

「いいわ。待ってる」

あのふたり絶対付き合ってる、と周りが噂しているのをよく耳にしますが気にしません。気にしないのは得意なので。

「ねえ城戸」

「んー」

「私のどこが好きなの？」

はあ？とかなり焦った様子で聞き返してくる城戸に私まで驚いてしまいました。

「そういえば、聞いてなかったなって思って」

「別にいいだろ。なんでも」

「教えてよ」

「うるせえバーカ！いつとくけど全然好きなタイプじゃねーからな」

「でも、好きなんですよ」

「……」

「どこが好きなの」

詰めた拳げ句、わかんねえと彼は答えました。
わかんねえ？何て失礼な奴でしょう。

「好きって、そーゆーもんじゃねえの」

少し怒ったような顔で言葉を投げた城戸。可愛くみえて仕方ありません。

私は城戸の手をぎゅっと握りました。

驚いた城戸が目丸くしてこちらを見ます。
廊下にいた何人かの生徒がこちらに気付き、ひそひそと話し始めました。

「今までで、一番嬉しい答えよ」

私だって、城戸のどこが好きなのか聞かれても分かりません。
がさつで馬鹿で見た目もチャラくて茶髪だし、背も同じくらいだし
口は悪いし、本当なら嫌いなタイプです。

でも、好きなのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5513r/>

たたかう女たち

2011年11月17日17時06分発行